

# 灯台紀行・旅日誌 2020 犬吠埼灯台編

<灯台紀行・旅日誌>2020#1 犬吠埼灯台編  
プロローグ

2020/03/24 十三時

おそらく、これが最後のひとり旅になるだろう。というのも、あと五年か十年経てば、体力的にも精神的にも、車を運転しての長旅は無理っぽいかからだ。いや、わからんけどね。

直接のきっかけは、十五年くらい一緒に暮らしてきたニャンコが、慢性腎不全でいよいよ危なくなってきた、死んでしまう日が迫ってきたことだ。いわゆる<ペットロス>。悲しいことだが、寿命ということか。

・・・旅のことを考えている。このパソコンが使い物になるのか？撮った写真を見ること、日誌をつけること、それにネット検索で情報を得ること。旅中は、おおよそ、この三つだろう。

午後四時、安比奈運動公園・中央駐車場。小一時間車の中で横になる。今日は比較的快適だった。リアウィンドを少し開け、耳栓、これでだいぶ良くなった。途中、暑くなりエアコンをつけた。持参した少し長い棒でブレーキペダルを押し、運転席に身を乗り出しては、指で始動ボタンを押してエンジンをかけた。横着な、楽なことを考えたわけだ。ま、これなら、高速パーキングでの仮眠もいけそうだ。

今日は、不都合が二つ見つかった。ひとつはナビ、2015年版になっていて、圏央道がまだ完成されていない。ホンダに問い合わせたら、¥22000ほどで更新できるようだ。ただし、今やるよりは、11月のほうがいい、というわけで、保留。よくよく考えたら、新しい地図も買ったのだし、古いナビと併用すれば、何とかなるような気がする。更新する必要性もないなと思ひ直す。

二つ目は、車内ではティファールが使えない。パソコンはちゃんと充電できるのに、なぜかだめだ。自宅の駐車場でもう一度試してみよう。例えば、延長コードを使って。…アンペアが絶対的に足りないから使えない、ということが帰宅後のネット検索ですぐに判明。やはり、カセットコンロとケトルだな。あと、チェアとテーブルは、グッド。洗面などもしてみたが、こちらもグッド。問題はない。車内での緊急おしっこは、口広のジュース缶で決まり。

## <灯台紀行・旅日誌>2020#2 犬吠埼灯台編

2020/03/26 十七時。

衝動的に、機内持ち込みのカメラバックを買ってしまった。アマゾンで、ロープロフォトストリーム RL150という品物、定価よりもかなり安くなっていた。約二万円。

はじめは、ふつうのキャスター付きのスーツケースを物色していた。値段的には、安いのは¥5000、高級なのは¥50000以上するものもある。そんなもんはいらない。かといって、あまりに安い物もいかななものか。いちおうブランド的に<ACE>とか

<無印良品>とか調べてみた。ま、¥20000 も出せば、いい物が手に入りそうだ。

と、ここで考えた。今回の旅でスーツケースに入れていく物は何か、パソコン、カメラなどだ。要するに、重いもの、壊れ物で、バックパックに入れて行くには心もとない。もともと、今思い出したが、2015年の沖縄旅では、カメラをバックパックの中に入れて行った。あのときは、三泊四日で、衣類も少なかったし、三脚も持って行かなかった。だが、今回は、旅の期間も長いし、そういうわけにもいくまい。

機内持ち込み用スーツケースとバックパック、それにポーチという出で立ちをイメージした。要するに、キャスター付きスーツケースは必須と考えた。が、待てよ、それなら、カメラバックでいいわけで、検索したら、そういう物が、¥20000 程度である。普通のスーツケースの中にカメラを入れて持ち運ぶより、こっちの方がより安全だ。というわけで、ま、衝動買いだな。

・・・昨日などは、夜遅くまで、福岡県について調べていた。観光スポットでは、平尾台というカースト台地が面白そうだ。あとは筑後川昇開橋、門司港レトロ、福岡観光では屋台ラーメン、それに飯塚・田川・直方などの筑豊炭田の遺構探索などがメインになりそうだ。この後、さらに海岸沿いの風景や灯台についても調べてみるつもりだ。

<灯台紀行・旅日誌>2020#3 犬吠埼灯台編  
一日目

2020/05/27(水)くもり。

とうとうこの日が来た。およそ十五年間一緒に暮らしたニャンコ、ベビちゃんを看取ってから約二か月弱、新しいプロジェクトが始まる。名付けて<日本灯台紀行>。また、大きくでたもんだ！

重度の慢性腎不全、多臓器不全を起こしている、もう助からないだろうという、ニャンコの約一か月の介護。そして最後の二日間は、それこそ、死ぬ苦しみを味わわせてしまった。絶命時、ニャンと短く鳴いて、息を引き取った。

苦しませてしまったという後悔、それに伴う罪悪感。深い悲しみ、気持ちが沈んだ。何十年かぶりに涙がこぼれた。だが、底の底まで気持ちが落ちたとき、このままではだめだ、という心の声が聞こえた。その声に励まされて旅の準備を始めた。

はじめは、九州の筑豊など、炭鉱跡をめぐり歩く旅を思いついた。かなり綿密に調べ上げ、日程表まで作った。例えば、九州国際空港に午後遅く到着して、その日は、近くの東横インに宿泊。翌日、近くのニッポンレンタカーで車を借りる。そのあとは、田川、飯塚、直方の炭鉱遺構や記念館を三日かけてゆっくり回る。旅の後半は、大牟田・三池炭鉱跡を見て、佐賀国際空港から帰宅の途につく、というものだ。

グーグルマップでシュミレーション走行したり、炭鉱の歴史をネットで調べたりして、ニャンコの辛い介護の日々を耐え忍び、この先訪れるであろう大きな悲しみ、ベビちゃんの死を乗り越え

ようとした。

ところが、大方、旅のプラン、イメージが固まったところで、これが人生最後の、自分のやりたかったことなのか、とふと思った。何か、ちがうような気がした。無理して頑張っているようなのだ。むろん、そういうことも必要だろう。だが、もういいではないか、自分を許す方向へと気持ちの流れが流れていった。

### <灯台紀行・旅日誌>2020#4 犬吠埼灯台編

そこで、再び浮かび上がってきたのは、灯台巡り、全国の有名な灯台を撮りに行くという計画だった。この計画は、父親を看取った後に思いついたもので、そのために車を買替え、実際に、原発近くのビジネスホテルに連泊して、御前崎灯台、掛川灯台、清水灯台などを撮影した。そして三泊四日の旅の帰りは、高速を約 280 キロ走って一気に帰って来た。もともと、新しい車に慣れていないということもあり、かなり疲れた。思い出すだけでも、帰路の運転はうんざりだ。

…ま、そんなこともあったのだ。その当時は、旅に行くたびに、ニャンコの世話を誰かに頼まなければならず、それのみか、ニャンコのことが気になってしょうがない。さっと用を済ませて、なるべく早く帰ってきたかった、というのが正直なところだ。

それに、そのあともいろいろあって、灯台旅の熱は、いったんさめ、ほとんど忘れかけていた。それが今になって再燃したのには、次のような理由がある。

先日、ユーチューブに〈荒川写真紀行 2018〉というスライドショーをアップした。エリックサティのジムノペディを延々、といっても30分ほどだが、繰り返し流しながら、背景に自分の写真を映し出すという趣向だ。

〈荒川写真紀行〉の写真は、空と雲と、川の流れなどが主題になっていて、ほぼ三か月間、晴れた日には必ず撮影した。その何というか、写真たちとサティが、自分で言うのもなんだが、よくマッチしていて、かなり満足している。

ちなみに、サティを繰り返し流すという趣向は、若かりし頃に、影響を受けた太田省吾という演出家が〈水の駅〉という作品で使っている。当時は、ちょっとルール違反じゃないの、とやや懐疑的だったが、四十年ほどたった今でも、その舞台が脳裏に焼き付いている。やはり、感動していたのだと思う。

太田さんは、たしか六十台で亡くなってしまい、主宰していた前衛劇団〈転形劇場〉も、ほぼ忘却の彼方だ。だからパクってもいいのか、というわけでもないが、自分が若かりし頃、唯一、入ろうかなと思った劇団の、尊敬する演出家へのオマージュ、ということにして、勘弁してもらおう。

話が脇にそれた。五月二十七日水曜日、旅の当日は六時に目が覚めた。さっと起きて軽く食事。そのあと、なんやかんや、いろいろやって、たとえば、家中のコンセントを全部抜いたり、持ち物表をチェックしたりで、ぐずぐずしてしまい、家を出たのは八時すぎだった。

ニャンコを火葬にしたあとは、ベッドの背もたれの上に、白い骨壺を置いて、時々声かけしながら、じっとコロナ騒動がおさまるのを待っていた。足止めを食らっていたのだ。五月中は無理だろうと思っていた。だが、急に政府の〈緊急事態宣言〉が解除された。といっても、他県への移動は〈自粛〉。だがもう我慢の限界を超えていた。ちょうど、木曜・金曜と千葉の銚子方面には、晴れマークがついている。ほぼ衝動的に飯岡灯台近くの宿を三泊予約してしまった。

## 〈灯台紀行・旅日誌〉2020#5 犬吠埼灯台編

…かなり前から、日本全国の有名な灯台をネット検索していた。そのなかで〈日本の灯台〉というサイトが、質量とも充実していて大いに参考になった。いや～、これだけの灯台巡り、すごい！写真も説明も丁寧、語り口も謙虚、なにしろ〈灯台熱〉が半端ない。

ま、それはそれとして、自分の体力を考えると、車で片道 200 キロ前後の場所までが限界だろう。しかも、ロケーションが素晴らしいところがいい。という基準で、最初に浮かび上がり、二重丸がついたのは、犬吠埼灯台だった。ここは日本灯台 50 選、世界灯台百選にも選ばれている。それにすぐ近くの飯岡灯台もいい。灯台旅の一発目は、ここしかない！

泊る場所は、灯台に近ければ近いほどいい。だが、いろいろと条件がある。旅館やペンションなどは、お一人様で泊まることができそうにもないし、素泊まりでも一万円以上する。民宿の

乱雑さには懲りているし、となれば、ビジネスホテルしかない。

最初は、日程も決まらないまま、銚子市内のちょっとお高いビジネスホテルを、念のためのコロナ対策ということで、六月後半に二泊予約した。だが、五月二十五日、急に〈緊急事態宣言〉が解除になった。そこで、ビジネスホテルを急遽キャンセルして、飯岡漁港近くの安めの宿に三泊することにした。

・・・話しがなかなか先に進まない。とにかく、当日は、朝八時に出発、ナビにかなり遠回りさせられ、少しイラついたが、30分ほどで最寄りの圏央道インターに滑り込んだ。道は空いていた。ガラガラ！いや、貸し切り状態といってもいい。

すぐに菖蒲パーキング、走り始めたばかりで休憩する気にもなれず、そのまま時速90キロ前後で気持ちよく走った。ただ、次の江戸崎パーキングまでが長かった。いま調べたら、菖蒲からは約80キロ近くもあり、小一時間かかる。すでに三、四十分走っているわけで、ここはやはり、菖蒲パーキングで一息入れておくべきだった。ま、次からの教訓だな。

江戸崎パーキングには、十一時前に着いた。トイレと自販機があるだけの小さなパーキング。人もあまりいない。端っこの方へ行って、体をほぐす。そうそう、トイレ入口の天井近くに、ツバメの巣があり、ヒナたちの黄色の口が見えた。施設内の誰かが大切にしているのだろう。気持ちのこもった張り紙などもあり、気が和む。鳥や花を大切に作る人間に悪い奴はいない、というのが持論だ！



パーキングで 20 分ほど休んで、疲労回復。そのあとは、あつという間に大栄インター。東関道の下りに入り、大栄パーキングを横眼で眺めながら、というのも、いざといときには、ここで車中泊しようという腹だ、帰りに寄ってみよう。

東関道大栄で降りた。料金は¥3800 ほど。自宅からここまで約 120 キロ、所要時間は二時間。その後はナビに導かれ、東総有料道路に入る。まったくの貸し切り状態、前後に車なし！有料道路だが料金所もなく、気分良く一般道に入る。

地方の県道なのか国道なのか、ほとんどノンストップ状態で旭市の市街地。ここはさすがに、郊外型の大型店が両側にびっしり。ヤマダ、ニトリ、イオンモールなどなど。大きな交差点を右折すると、また貸し切り状態。あつという間に飯岡灯台に着いた。十二時を少し回っていた。総距離 160 キロ、三時間の行程。あまり疲れていない。気を張っているせいかな？

## <灯台紀行・旅日誌>2020#6 犬吠埼灯台編

飯岡灯台下見。小ぶりな、白いタイル張りの灯台で、正面からはどうにも写真にならない。下調べしたように、撮影ポイントは一か所だけ。すなわち、無料の展望台から、手前に灯台を入れ、右側に飯岡漁港の防波堤などを斜めに入れる構図だ。

ま、いい。灯台敷地の柵によりかかりながら、眼下の飯岡漁港を眺めた。つい二、三日、飯岡漁港に押し寄せる、あの大地震の大津波をユーチューブで見た。おそらく、撮影者が位置し

ていたであろう所に、いま自分が立っている。津波が白い波しぶきを立て、沖から押し寄せてくる。あっという間に防波堤を越え、船溜まりの漁船をいとも簡単に押し流していく。その光景がまざまざとよみがえった。自然は美しく、かつ残酷だ。厳粛な気持ちになった。

気分を変えよう。灯台の周りをぶらぶら歩きながら、写真を撮った。灯台の横の方に、海を臨んだ、漫画チックなく力石徹>の石像があった。飯岡は<ちばてつや>が、戦後すぐに大陸から引き揚げて来た頃に生活したところらしい。なぜかちょっと意外な気がした。<あしたのジョー>を夢中で読んだのは、もう半世紀以上前のことだ。

それからもう一つ、飯岡、と聞いて、思い浮かんだのは<飯岡助五郎>だ。記憶があいまいで、いまネットで調べてみた。あ～、思った通りだ。講談の<天保水滸伝>によれば、笹川繁蔵を闇討ちにした悪親分？だったわけだ。

…子供のころ、なんで聞き知ったのか、映画なのか？よくわからないが、その後、演劇青年をやっていたころ、三鷹で<黒テント>の<チャンバラ>という芝居を見た。その時<しげぞおおおお～～～>という役者の絶叫によって、突如、過去の記憶が呼び覚まされた。不思議な体験が、いまだに体に宿っている。そうだ、やくざの親分、飯岡助五郎と笹川繁蔵、それに用心棒の平手造酒。面白おかしく尾ひれをつけて、やくざの抗争を講釈師が語っていたのだろう。その、飯岡助五郎の墓が、この近くにあるらしい。…ちょっと行ってもよかったのだが、いま

は灯台熱が高じている。いつか、またそのうちだ。

三、四十分ぶらついて、飯岡灯台を後にした。ナビを犬吠埼灯台にセットした。目指すは、君ヶ浜の灯台寄りの駐車場だ。ところが、現着してみると、コロナで閉鎖中！これには参ったが、すぐに気分を取り直して、灯台下の駐車場へ行く。

車を止め、まずは灯台正面辺りをぶらついて、写真を撮る。犬吠埼灯台は登れる灯台だが、むろんコロナで閉鎖中。ま、こちらはどうでもいい。灯台に登ってしまっただけは、灯台が撮れない。…昼もだいぶ過ぎている。なのに、腹が空かない。缶コーヒーなどを飲んでやり過ごす。

車に戻り、機材を背負い、浜へ下りた。ちょっとしんどい。撮影ポイントを探しながら、砂浜沿いの護岸縁を歩く。ちょうど、白っぽい腰掛石が五個、等間隔に並んでいる所。背後に、遊歩道があるものの、誰にも邪魔されず、三脚を立てられる。灯台の垂直を出すにも、まずまずの好位置。何枚か試写して引き上げる。

車の中で時計を見ると、三時半を回っている。飯岡灯台へ戻ろう。日没前の＜ゴールデンアワー＞それから明かりのついた灯台の夜間撮影。これが初日の、本気を出す撮影だ。

＜灯台紀行・旅日誌＞2020#7 犬吠埼灯台編

五時すぎに、再度飯岡灯台に現着。陽は西に傾き始めていた。

といっても、まだまだ明るい。フル装備で、展望台の階段を上る。振り返ると、東側の台地、下総台地に巨大風車が林立している。望遠 400mm で何枚か撮った。

さらに、海の中にも風車が一基ある。これは銚子市が東電と組んだ、洋上風力発電の実証実験だそうだ・・・世界に飛び出すと、まあ～いろんなことに出っくわすものだ。冷やかし半分に、パチリと、こやつも一枚撮った。

階段を上りきると、まずまずきれいな展望室。とはいえ、窓があるわけでもなく、ダイレクトに南西側の海が眺められる。要するに、ベランダ仕様だ。ぐるっと見回して、灯台君を見下ろす位置に三脚を立てた。ところがどっこい、仕切り壁から乗り出さないと、灯台と防波堤が画面におさまらない。

う～ん、しかたない。手持ちでベストポジションを確認、何枚か、かなり慎重に撮った。ちなみに、このポジションは、ネットで見た写真の中では最高のもので、多くの人が撮っている場所だ。むろん、同じ場所から撮ったとしても、自分がそれ以上の写真が撮れるとは、正直思わないが、ま、この場所しかないのだ。

さてと、そうこうしているうちに、ますます陽は傾き、空の色が徐々に変わり始めた。写真の世界でいうところの<ゴールアワー>だ。どの場所がいいのか、うかつにも、夕景のベストポジションは調べていない。

とりあえず、灯台正面に出た。西側の空を染まっている。まさに

夕日が落ちつつある。あ～、そうだ、ここは夕日がきれいなところだったんだ。われながら、マヌケな感想だ。問題は、灯台をその夕日に絡めて、どの位置に三脚を立てるか、ということだ。

あたふたしながら、何とか灯台と夕日を画面におさめた。さあ、予行演習していた、日没の撮影だ。え～と、マニュアルモード、F値 8、ほぼ無限大にピント、ISO オート、ホワイトバランスオート、シャッタースピードの調整で、露出を沈む前は三分の二アンダー、沈んだら適正にする、だったかな？なんだか、頭が真っ白になっていた。おぼつかない。

おりしも、まさに<ゴールデンアワー>なんだか人影が一気に増えてきた。だれもが夕陽を見に来たわけか！なかでも、若いカップルが多いような気がする。ま、そんなことはどうでもいい、集中だ。ファインダーをのぞきながら、ほぼ初めての夕景の撮影を開始した。

その時は、気分が高揚していて、モニターなどもろくにしないで、リモコンのシャッター音に酔っていた。もともと、辺りが暗くなってきて、モニターそのものがかなり難しい。そしてついに日没。おっと、灯台の頭にあるライトがうっすら点灯。今度は<ブルーアワー>だ。

シャッタースピードを落として、カメラ内のインジケーターを、適性のゼロに合わせる。ほぼ暗い。それでも、かなりの人影。<ブルーアワー>とは日没後の数十分のこと、こっちの方が、空がきれい撮れているように感じた。気持ち的に、少し余裕が出

てきたので、ホワイトバランスをいろいろ試してみた。晴れマークのところが一番きれいだな、と判断できるようになった。

そのうち、陽は完全に沈んで、空の色は紺碧から漆黒へと変わっていった。とはいえ、周辺を見回すと、展望台の照明などでさほど暗くはない。と、灯台の頭にある照明が点灯したままで動かない。おやっと思った。が、すぐに得心した。この灯台の役目は、飯岡港に入ってくる漁船の目印だ。光線をぐるぐるさせる必要はない。

ちなみに、灯台のレンズには<閃光レンズ>と<不動レンズ>があるようだ。閃光の方は、レンズが回っていて、結果、光線がぐるぐる回っているように見える。一方、不動の方は、ついたり消えたりするだけらしい。飯岡灯台の仕様は<不動フランネル式 300 mm・明三秒・暗三秒>ということになっていた。

### <灯台紀行・旅日誌>2020#8 犬吠埼灯台編

初陣の夜間撮影を夢中でやっているのと、展望台前の、ちょっとした広場で、何やらうるさい物音が聞こえる。カメラから目を放して、ちょっと見に行く。はは〜ん、若者がスケボーで遊んでいる。わざわざこんなところで、しかもこんな時間に、といってもまだ夜の七時だが、なんなんだ！ま、そのうちやめるだろう。

三脚に戻り、ほとんどわけもわからないまま、カメラをいじくりまわして、その都度モニターした。ま、勉強だな。時間のたつのも忘れ、頭の片隅では、スケボーがうるさいと思いながら、これ

以上はもう、うまく撮れないと思えるまで粘った。

ふ〜と一息ついた。周りを見回した。展望台などに人影を確認して、その場を後にした。ちなみに、スケボーの若者も、どうい  
うわけか、一緒に終了。目で追うと、端の方に止めてあった、  
白い軽のバンに乗り込んだ。仕事帰りか、時間調整か、ま、もう  
どうでもいいが。車に乗り込み、高台の灯台から、坂を下った。  
バックミラーに、ヘッドライトが見える。灯台の駐車場はどんづ  
まりだから、灯台にいた車であることは間違いない。ひよつと  
したらスケボー野郎かも知れない。帰りまでご一緒だ！

名前は伏せる。宿泊したビジネスホテルだ。なぜかというと、文  
句しか出てこないし、それを書けば、営業妨害になるやもしれ  
ぬからだ。そこまでの恨みはない。とはいえ、一言だけ言い添  
えておこう。汚かった！一泊¥4500、安いとはいえ、これはな  
いよな、という感じだった。昼が擦り切れていたのだから、あと  
はご想像にお任せする。

それからもう一つ。食料調達したコンビニのおにぎりが、これほ  
どまずいのか、と思うほどだった。もともと、食欲がまるつきりな  
くて、さほど腹は立たなかったが。とはいえ、朝食用に買った  
ブドウパンは、まあまあ食べられた。一晩冷蔵庫に入れたにも  
かかわらずだ。・・・疲れた。かなり疲れた。もう寝よう。宿に八  
時過ぎについて、十時には布団の中に入った。

一日目の出費・高速¥3820、食事等¥1200、宿泊三日分  
¥12900。

二日目。

四時過ぎに目が覚める。西側の障子が明るくなり、寝ていられない感じ。それでも、もう少し眠ろう、ということで六時前まで布団の中でぐずぐずする。

六時起床、洗面、朝食・昨晚買っておいたおにぎり、持参したカップ麺。食欲がないせいか、どっちも、うんざりするほどまずい！排便・小。むろん、ぼろホテルに温水便座などはない。…痔持ちの自分にとって、温水便座は必須。だが、ま、非常時ということで、流水で肛門をさっと洗う。

身支度をして、八時前に出発。ナビを犬吠埼灯台にセット。途中、長崎鼻のぬぼっとした照射塔を何枚か撮る。さらに、海沿いの道に路駐して、東側から、遠方の犬吠埼灯台を狙った。

胸の高さほどのコンクリの護岸、その上に、重い望遠レンズを置いて撮影。要するに、三脚を立てるほどの景色ではないが、VR を利かせたところで、手持ちではブレてしまうからだ。とはいえ、あまりに遠目過ぎる。それに、空の色もさえない。今日は朝から晴れの予報なのだが、チェ！

ほとんど貸し切り状態の、右手に海が見える景色の良い道を、気持ちよく走り、九時前に犬吠埼灯台に到着。駐車場に車を止め、灯台周りの散策。一応、正面、周囲、それから海岸沿いの遊歩道など、スナップしながらぶらつく。



撮影ポイントは二つ、正面やや右側、灯台の窓が少し左側に見えるあたりがいい。もう一つは、遊歩道の終点、白いホテルへ通じる道に上がる鉄階段の踊り場。ただし、画面左下に青い電線がぶら下がってしまう。

この場所には、どう考えても三脚は立てられない。とはいえ、遠目だが、緑の断崖にちょこんと頭を見せている白い灯台、望遠なら何とか絵にできるかもしれない。横着して、望遠レンズを持ってこなかったことを少し悔やんだ。

帰路は、遊歩道を戻らなかった。可能な場合は、復路は、往路とは違う道を歩くことにしている。それに今回の場合、特に、遊歩道にある辛気臭いトンネルが嫌だった。それに、違った道を歩けば、違った景色に出会える可能性も高い。

海岸沿いに建つ白いホテルをちらっと眺めた。場所的に最高。だが、オヤジのひとり旅、しかも撮影旅行には不向きだ。むろん宿泊費も高い。豪華な夕食など必要ないし、素泊まりで¥10000はいくら何でも高すぎるだろう。

だらだらと坂をのぼった。すこし息が切れた。そこは海に見える高台だった。目の前を一般道が走っている。その先に灯台が見える。右側は、大げさに言えば太平洋だ。柵のある歩道を少し行くと、なんだか、陶芸店のようなものがあり、さらにその先に、一抱えもする大きな菱形の石に、何やら文字が見える。

立ち止まって、じっくり眺めた。高浜虚子の句碑らしい。<犬

吠の 今宵の朧 待つとせん>。最後の<待つとせん>が読めなかったが、案内板があり、了解。口の中で何回か唱え、覚えようとした。例の海岸沿いのホテルに泊まって、部屋からぼうっと霞んだ灯台の明かりが見えたのかもしれない。向き直って、太平洋の水平線を見た。すこしばかり、文学っぽい気分になった。

### <灯台紀行・旅日誌>2020#9 犬吠埼灯台編

駐車場に戻った。布の大きめなトートバックに、飲料水などを放り込み、重いカメラバックを背負った。長い階段を下って浜へおりた。もう暑くなり始めていた。下見しておいた場所へ一直線に向かい、石の腰掛に荷物を置いた。柵沿いに三脚を二本立て、犬吠埼灯台にカメラを向けた。

三脚は二本持参している。一本はジッツオの使いやすいもの。もう一本はベルボンの、やや使い勝手が悪いもの。それぞれに望遠ズーム、標準ズームつけて撮影するつもりだ。要するに、柵沿いに三脚を二本並べ、近目と遠目で撮るわけだ。

が、いざ実際、二台のカメラで灯台をモニターすると、ベストアングルというものは、ほぼ一か所なので、当たり前だ<ベスト>なのだから、多少の近い遠いはあるものの、画面は似たり寄ったりだった。それよりも、正面の海。空があって、雲が流れて、水平線があって、たゆたゆと波が押し寄せている。この風景を撮らないということはない！

というわけで、三脚は一本にして、望遠を手持ちで、浅はかにも、海と、ちょっと遠目の灯台を撮ることにした。そして、来る前から計画していた、五分間隔のインターバル撮影の手順に従った。

時計を見た。五分経った。三脚につけているカメラのファインダー覗いて、リモコンのボタンを慎重に押す。取って返して、望遠カメラを、後ろの石の上に置いてあるトートバックから取り出す。ぶれないように、柵に肘をしっかりとつけて、まず、海を撮り、ほぼそのままの姿勢で、少し体を右にひねり、灯台を撮った。

この作業を、十一時半から、およそ二時半まで続けた。本当は、体力と気力が続いたのならば、日没後までやるつもりでいた。ところがどっこい、そうはいかない。久しぶりのアウトドア、しかも海岸だ。

セッティング作業のうちには、暑さをそれほど感じなかった。太陽の位置を、手のひらを天にかざして確かめ、ほぼ真上だな、などと思った。まだ余裕があった。

ところが、作業がひと段落して、一息ついたら、いきなり息苦しいほどの暑さを感じた。まず、足の甲が、焼けるように熱い。厚手の靴下をはいていたのだ。薄手の物に替えたかったが、車の中だ。パーカも厚手のもので、これにも参った。だが、薄手はこれまた車の中だ。撮りに行くことなど、到底無理だろう。

…サンダルも車の中にあるが、この強烈な紫外線、直射日光を、直接浴びることになる。どうしようか？海辺にフードのついたパーカは必須、だが絶対、薄手でなければだめだ。撮影の手順を正確に守りながら、次回の教訓だな、などと思った。

何しろ、フードですっぽり、頬の真ん中まで覆い、サングラス、そのうえマスクだ。自分の風体を気にする余裕もなかった。が、夕方になり、ふと車のウィンドーガラスで、自分を見た。まるでコンビニ強盗だ！どおりで、遊歩道を行き来する人から、話しかけられなかったわけだ。怪しすぎる。

…正直いって、海辺の暑さ、要するに紫外線と直射日光は、老人には、自分では老人とは思っていないが、かなりきつくて長時間の滞在は無理だ。もともと、日陰で寝ているならば話は別だ。ところが、自分の場合は、五分ごとに、写真を撮らねばならず、悪いことに、その際には、サングラスを外さざるを得ないという不幸？も重なった。

だが、眼をやられたら最後だろう。二十年前、失明に瀕した時のことを、ちらっと思った。あの時以来、サングラスを手放したことはなく、外出する際には、財布と鍵と同様、必ず身につけている。念のため、今回も、替えのサングラスを用意してきたほどだ。

話を戻そう。カメラのファインダーをのぞく際には、どうしても、サングラスを外さなければならず、その時の紫外線が、やりきれないほど、きつい。こんな体験は今までになく、ほとんど苦行

に近い。でも、これはまずいだらう。何しろ目を守らねばならないのだ。と、あろうことか、サングラスを掛けたまま、ファインダーを見ることにした。ま、窮すれば何とやらで、むろん色が変わって見えるが、一発撮りとは違い、ほぼどんな感じに撮れているかは、了解済みだ。空や雲や波が、五分間で、どの程度変化しているかを確かめるだけでいい、のではないか。

眼は、これでだいぶ楽になった。熱中症を警戒して、頻繁に持参した水を、ペットボトルから飲んだ。また、手のひらを太陽にかざした。真ん中より少し西に傾き始めた。足の甲は、撮影中は、柵の陰に置くようにした。休憩中は、靴を脱いで、自分の体の影に入れるようにした。

御影の石に腰かけて、うつむいて、苦行にも似た時間を、じつと全身で受け止めた。五分ごとの撮影が、なんだかなおざり、モニターもしっかり確認していなかったぞ。それに四、六時中、パーカの背中が、焼けるように熱い。なんだか頭がすこし痛い。熱中症予防のために、水はたくさん飲んでいるのに、少し気分も悪い、むかむかする。

ぼろっとした頭で、明日もあるぞ、ここで体調を崩すわけには行かないぞ。そうだよな、もう、限界だらう。そう思ったら、急に弱気になった。時計を見た。二時半だった。三時間頑張ったわけだ。迷うことなく、撮影を中止した。

<灯台紀行・旅日誌>2020#10 犬吠埼灯台編

浜辺から、長い階段を登って、駐車場へ戻った。足が重い、しんどかったような気もする。車の中は、蒸し風呂！すぐにエアコン全開、窓にシールド。パーカやズボンを脱いで、倒れこむように横になった。ちなみに、後部座席は、体を伸ばして仮眠できるようにカスタマイズされている。ご丁寧に、布団も枕も持ち込んでいた。

来る前にシュミレーションしたように、耳栓をした。犬吠埼テラステラスの裏側、この駐車場は一般道に面していたが、なんと正面は老人ホームだった。車の出入り、騒音は、ほとんど気にならなかった。耳栓のおかげか、それとも体が参っていたせいかわ、すぐに寝ているとも覚めているともつかない状態に陥った。エアコンの温度や、車内の不愉快な暑さなどを意識しながらも、ひたすら、だと思いが、体の回復を願っていたような気もする。

ひと眠りしたのだろうか、夢うつつの状態から覚めた。たしか、四時半少し前だったような気もする。が、はっきりとは覚えていない。

うん、少し気分がよくなったような気がする。身支度。サンダル履きで、そう、カメラを首にかけ、というのは、2020年5月28日4時46分に、西日の当たっている灯台を、広場右側から撮った写真が残っているからだが、その前に、午前中同様、トイレ、そうだ、トイレにも行ったのだ。観光地のトイレとしては、比較的綺麗だった。だが、コロナ感染を意識して、すぐに出てきた。

そのトイレの向かい側、休業している土産物屋の赤い自販機

で、午前中と同じ、アルミボトルの缶コーヒーを買って、歩き飲みした。まずくはなかった。たしか¥130、安いなと思った。朝、貧しい朝食をとったきりで、その後、ビスケットを少し齧った程度だった。とはいえ、腹は空いていなかった。

右側は海だった。大げさに言えば、太平洋だ。1枚撮った。あとは、灯台の正面辺りを、観光客気分でごらついて、これみよがしに写真などを撮ったのだらう。もっとも、コロナ感染の自粛は続いていて、いまだ県をまたいだ移動は制限されていた。かまうものかとシカとして、川越ナンバーで千葉県に乗り込んだものの、灯台付近の車は、ほとんどが千葉ナンバーだった。まあ、いちゃもんをつけられることもないだろう。そうなったら、すぐにくすいません>と謙虚に謝ってしまおう。生意気なくせに、小心で臆病な性格が、年を取れば取るほど際立ってきた。

灯台前にある、テラステラスというこぎれいな施設に、このとき入ったのか、よく記憶していない。きれいなトイレで、しかも温水便座で排便して、さらに気分がよくなったような気もする。その後、この施設には旅の3日目、4日目にも立ち寄って、カレーを食べ、トイレにも必ず寄って、気持ちよく排便した。

気分がよくなった。頭がすっきりした。これなら夜の撮影ができそうだ。そう思いながら、車に戻った。装備を整え、といっても、午後の不覚を教訓にして、薄手のパーカ、薄手の靴下、トートバックには、ペットボトルの水、ビスケット、念のためにダウンパーカ、それにおしっこ缶、それだけだ。

…おしっこ缶というのは、アルミのやや口径の大きいボトル缶のことで、車内や撮影中、トイレに行くのがめんどくさいときに使用する、いわば、携帯用の尿瓶だ。つまり、したくなったら、イチモツの先ちょをその中に突っ込んで、用を足すわけだ。イチモツ、などと大きな口をたたいているが、息子の頭は小ぶりだから、ちょうどいい。ま、どうでもいいことだな。

あとはカメラバックに三脚二本。こっちは、かなりの重さだ。が、苦にはならなかった。もつとも、下り階段だ。浜に下りると、辺りは薄暗くなっていた。午後の五時半を回っていた。まっすぐ、例の撮影場所へ向かった。海風が心地よかった。

#### <灯台紀行・旅日誌>2020#11 犬吠埼灯台編

三脚を立て、カメラをセットしかかったとき、後方から、マウンテンバイクに乗った若者が数名、大きな声で話しながらやってきた。あれ〜、と思っていると、自分から四メートルくらい離れた柵のところで、釣りを始めた。ほぼ等間隔に並んで、四人ほど、かがみこんで釣り針にえさをつけ、大きく竿を振って、海の中へ投げ込んでいる。

薄暗がりだった。だが、話声と顔つきで、外国人、それも中国人でも韓国人でもなく、東南アジア系の若者だと思った。嫌なことに、その中でも体格の一番いい奴が、俺の隣にいる。ふと、集団で、あるいは、あいつに襲われたら勝てないなと思った。もつとも、状況から判断して、いちゃもんをつけられる可能性は低い。シカとして、五分間インターバル撮影を続けた。若造に、



根拠もなく、びくびくしている自分が情けなかった。

次第にあたりが暗くなった。灯台の真ん中あたりが、下からの照明で照らされ、そこだけが楕円形に明るくなった。用意してきた、アウトドア用のヘッドランプをつけて、ほとんど初めての夜間撮影に挑戦した。アジア系の若者たちは、予想に反して、暗くなっても立ち去らなかった。それどころか、懐中電灯を持参していて、手元を照らしながら、盛んにエサを交換しては、大きく竿を振っている。夜釣りに来たんだ！浜風の中、何語なのかな？タイとかベトナムとか、そんな感じの語音が飛び交っていた。

インターバル撮影の合間には、若者たちの行動を横目でちらちら追いながらも、刻一刻と表情を変えていく、灯台周辺の光景を全身で感得していた。午後の、あの暑さと比べて、いまはかなり心地よい。むしろ、寒いほどだ。ヒートテックのタイツをはき、長めのダウンパーカを羽織った。これでちょうどいい。ビスケットを少し齧り、水を飲んだ。腹の調子も少し良くなっていた。こんな時間に、こんなところで、写真を撮っている。念願がかなっている。世界の前に立っている。自分の人生を生きていると思った。

海と空が、漆黒の闇に覆われ、灯台が光を発し始めた。そう、問題は、あの光線を写真に撮ることだ。ネットで、犬吠埼灯台の画像を、いやというほど検索したが、左真横、一直線の光線をとらえた写真は、わずか一枚にすぎない。しかも、その写真は<写真素材>として、有料で貸し出されていた。

天と海の間を、一直線に走る灯台の光線。なんとまあ、ロマンがあるではないか。前に言った<作品>というのは、この五分インターバルで撮った写真群を、編集してスライドショーにする心づもりだったわけで、ラストは、いや、ラス前あたりに、この一直線の灯台の光線が、ぜひとも欲しいものだ。

ところが、丹念な検索の結果にもかかわらず、灯台の光線を撮る方法は、見つけられなかった。星空とか、夜景とか、それから、近いものでは、光線を多重撮影して、灯台の周りにぐるっとめぐらす方法とかはあった。もっとも、多重撮影は自分の頭と腕がついていかないわけで、試すことすらしていない。というよりも、灯台から光線が放射状に出ているというのは、いかにも、作り物の感じがして、いささか趣に欠ける。

だが、いちおう、灯台の光線を撮る方法を、自分なりに調べ上げ、メモしていた。手順はこうだ、モードは M、f 値 2.8、ss 一秒から二分の一秒、ISO8000、いや、ほかにもメモがある。シャッタースピード ss が長ければ長いほど光跡の幅が広がるとか、光線がカメラレンズに向かないタイミングをはかるとか、要するに、切れ端のネット知識だ。

実際はすべて、役に立たなかった。これらのやり方では、むしろその場でいろいろ試したが、光線は撮れなかった。そもそも、何秒かおきに、ぐるぐる回っている光線を、左真一文字に来た時に写し撮ろうとするならば、シャッタースピードは、かなり早いものでなければなるまい。そんな瞬間は、あっという間に過ぎてしまう。

今思ったのだが、光線が動かず、不動のまま、海を照らしているならば、上記の方法は有効なのかもしれない。いや、これも試していないので、わからない。要するに何もかもわからず、いや、今日の段階では、光線は撮れない、ということが分かったわけだ。得心した。気持ちが覚めた。引き上げようと思った。カメラを三脚から外し、バックに収納した。

少し前に、二、三人仲間が加わった、アジア系の若者たちは、その後もまじめに？釣りを楽しんでた。新たに加わった連中は、柵を乗り越え、三メートルほど下の、波消しブロックに降り立ち、座りこみ、釣り糸をたらしている。自分の隣の大柄な若者は、なかでも、釣りがうまいのか、何匹も釣り上げていた。

彼らが、どこから来たのか、何をしているのか、すぐには思いつかなかった。食いつめたような様子もないし、みな立派なマウンテンバイクを持っている。留学生なのかもしれない、あまり深くは考えなかった。考える必要もなかった。ただ、いちやもんをつけられるのではないかと、最初、びくびくした自分を少し恥じた。

カメラバックを背負う前に、柵に両肘をついて、暗闇に浮かぶ灯台をつくづく眺めた。たしかに、光線は出ている。ある間隔をおき、右の方から光り始め、こちらに向かってピカリ、そのあとは、例の左真一文字の光線を、茫漠とした闇の中に放って、左うしろに消える。この循環を、一晩中続けているわけだ。

ただねえ～、その闇に放たれる、左一文字の光線は、すごく薄

くて、かすかに見える程度のものだ。しかも一瞬！あれを写真に撮ることなど、土台無理なのではないか、自分がネットで見た写真は、何か細工したものではないのかとさえ疑った。ま、いい、光線は撮れなくても、写真はたくさん撮った。撮れたはずだ！

## <灯台紀行・旅日誌>2020#12 犬吠埼灯台編

夜道を宿へ向かった。三十分ほどで、さしたる疲労も感じないで現着。途中、昨晚も寄ったコンビニで食料を調達した。朝食用に、ブドウパンと牛乳、夕食用には、おにぎり三個とからあげクンを買った。部屋に入って、すぐ着替えて温泉に入った。麦茶を煮込んだような色の、ぬるぬるの温泉だ。湯船は一つで、三畳ほどの広さ、四方がジャグジーになっている。ゆっくりと腰をほぐした。

独特の匂いが立ちこめていたが、道路側のサッシの窓を開けると、涼しい風が入ってきて、心地よかった。脱衣場、その他いろいろなことには目をつぶって、この貸し切り温泉を楽しんだ。そう、湯船に入るとき、足の甲、手の甲が染みた。見ると、真っ赤になっている。顔も焼けた、鼻が赤くなっていた。

部屋に戻って、冷蔵庫に入れておいた、冷えたノンアルビールを飲んだ。うまかったとおもう。というのも、何しろ疲れていたのだから、いや疲れていたのだから、そのまま倒れこむように寝てしまったのだから。九時前に着到して、十時すぎにはもう寝ていたと思う。幸いも、周りは静かで、物音で目が覚めることもなか

った。二、三回、夜間トイレで起きたような気もするが、よく眠れた方だ。

今日の出費、食品・飲み物¥980。

三日目。

朝の四時過ぎに目が覚めた。朝日に照らされた、オレンジ色の障子がまぶしかった。十時に寝たのだから六時間は寝たわけか、と思ったような気もする。すっと起きて、障子をあげ、ついでに重いサッシ窓も開けた。目の前には飯岡漁港、釣りの名所らしく、防波堤の手前に車がたくさん止まっている。

その向こうには刑部岬・ぎょうぶみさきと読むらしい。絶壁になっていて、その上に飯岡灯台と展望台のシルエットが見える。こちらからは逆光だが、輪郭が朝日に照らされ、ほんのり朱色に染まっている。絶壁の中ほどまで、うっすら霧が立ち込めていて、早朝の神々しい光景が広がっていた。写真には撮らなかったが、というのも、埃だらけのベランダに出るが嫌だったし、だいいち、そんな余裕も時間もなかった。

日の出は撮れないとしても、朝日をうけた犬吠埼灯台の前に一刻も早く行きたかった。さっと身支度をして、ブドウパンを牛乳で胃の中に流し込み、部屋を出た。その際、スーパーで使うような、黄色のプラかごに、使用済みバスタオルなどを入れ、小さなごみ箱と一緒に廊下に出した。

これが、この宿における連泊者の唯一の義務らしい。帰ってく

ると、ドアの横にそのかごが置いてあり、中に新しいタオルと歯ブラシセットが入っている。連泊者の部屋の掃除などは論外というわけか！ま、三日くらいだから問題はない。だが、これが一週間とか、長期間になったら、どうするのだろうか。受付に言えばやってくれるのかもしれない。ま、どうもいいことだ。こっちは忙しいんだ。

ドアの鍵を閉めた。もともと、鍵のくっついているプラの透明な棒を触るのも、ドアノブも、エレベーターのボタンも、なんか嫌な感じがした。コロナ菌がついていないだろうか？そういうことに関しては、かなり神経質らしい。一階の薄暗い受付には誰もいなかった。半自動ドアの玄関は、24 四時間開いているようだ。その点は便利だ。いや、考えようによっては不用心だろう。

車に乗り込んだ。なぜか、少しホッとした。この中にはコロナ菌などいない。それが、安心の多少の理由になっていたのかもしれない。時計を見た。四時に起きたのに、もう五時すぎだ。一応、念のため、ナビを〈犬吠埼灯台〉にセットした。

平日だが、道は空いていた。当たり前だ、まだ早朝の五時すぎだ。ほとんど貸し切り状態で、多少見知った、今日で三回目の道を気分良く走った。途中、屏風ヶ浦の高台に差しかかると、長い直線の道路が波打っていて、朝日に照らされている。右側にはちらちらと海が見え、左側には巨大風車が林立していた。飯岡灯台の展望台から見た、東総台地を走っているわけだ。なんだか自分が映画の主人公になった気分だった。

五時半過ぎに、犬吠埼灯台の商業施設、テラステラス裏側の駐車場に着いたはずだ。ここは、昨日車を止めた、道路沿いの駐車場よりは一段と高くなっている。浜への上り下りがすこし大変になる。いや、大した距離じゃない。ここを選んだのは、今日の午後、正確には十一時半から二時半までだが、車の中で仮眠をするためだ。こっちの駐車場の端っこが、代較的静かだろうと思ったのだ。真昼間の浜辺の暑さと日射には懲りていた。

誰もいないかと思いきや、その、浜が見下ろせる駐車スペースには先客がいた。黒っぽい車で県外ナンバーだったかな、窓に日よけなどをしている。ちらっと車内で仮眠している姿が見えた。一瞬で、日の出を撮りに来たアマチュアの、しかもオヤジカメラマンだなと思った。ま、別にいいさ、目くじらを立てることもない。一台あけて、柵際の狙っていたスペースに車を止めた。

装備をととのえ、浜へ下りた。昨日の教訓を生かして、薄手のパーカ、薄手の靴下、ペットボトルの水も二本持った。とはいえ、昨日来の疲れが残っていたのだろう、カメラバックが肩に重かった。トートバックも腕に食い込んで痛かった。

少し砂地を歩いて、お決まり撮影場所についた。カメラを三脚にセットした。昨日と同じ場所に、というのも小石で目印をつけておいたのだが、どうもよろしくない。下が砂地で三脚の足が食い込んでいる。同じアングルが作れない。・・・なにか、三脚の足に敷くものを用意するべきだなと思った。

時計を見た、六時を回っていた。下の浜では、十代の男女が数人、海に入って戯れている。早朝の誰もいない浜辺で、大きな声を出して騒いでいる。どういふつもりなのか。カメラと灯台の間にいるので、否応なく、画面に入ってしまう。ま、いいか。変化があつて。

二台のカメラのうち、望遠の方は、海に向けた。ちょうど、朝日が昇ってくる方向だ。今はもう、立派な？太陽になっていて、その光を受けた海面がきらきらしている。まともに見ては、眼がやられる。

そうそう、今朝は雲一つない快晴だ。こりゃ～暑くなるなと思った。だが、実際には、浜風が強く、直射日光をもろに浴びているものの、さほど暑さは感じない。もつともまだ朝の六時台だ。それよりも、特記すべきは快晴、雲一つない青空。天気予報を検討して、この二日しかないと決断して出てきた撮影行だ。まさにどんピシャリで、昨日は多少の雲があり、照ったり陰ったり空。今日は、朝からおそらく終日、100%の快晴！

ま、野外撮影に、青空があることは、それだけで OK だ。欲を言えば、多少雲が流れている方が絵になる。そんな贅沢は言ってもらえないだろう。晴れただけでも感謝するべきだ。年間、字義通り、雲ひとつない青空が、何日あると思う。正確には知る由もないが、経験で、いや、カンで、いや、あてずっぽうで言えば、二十日以下だと思う。月に一回あるかないか、そんな感じだろう。



…今ネットで調べた。快晴率。快晴とは、雲が青空に占める割合が 0～15%くらいの状態と定義される。全国平均すれば、驚いたことに 28 日前後だった。もっとも、かなりの開きがあり、埼玉県などは全国最高の 61 日！ま、どうでもいいことだ。快晴だからといって、必ずしもいい写真が撮れるわけではない。率は高いけどね。ちなみに、千葉県は年間で 20 日だった！

### <灯台紀行・旅日誌>2020#13 犬吠埼灯台編

その快晴の直射日光を受けながら、五分間インターバル撮影を続けた。いつしか、浜の若者たちもいなくなっていた。きらきらと光る海面は、しだいに右の方へ遠のいていき、海は静かになっていった。ただ、水平線の手前、沖を行き来する船が多くなったような気がする。いろいろな船影があり、速度もそれぞれで、見ていて飽きない。

と、いきなり、背後から声がした。今回の四泊五日の撮影旅行では、二人の男から話しかけられた。その一人、ほぼ爺に近いチャリに乗ったオヤジだ。「昨日も撮っていたよな、仕事か？」高圧的な感じでもなく、普通を感じだったので、その後、しばらく雑談した。内容は、ま、ほとんど忘れたが、覚えていることは、沖を行き来する船についての、爺の話だ。

「望遠で見てみな、あの船止まってるのか？動いているか？」そう言われたので、しかたなしにカメラを覗いた。大きな船影、フェリーだった。「かすかに動いる」と答えた。あとは「あの二艘の船、巻き網漁をしているんだ」と爺が聞かれもしないのにしゃ

べっている。一応話を合わせて「今は何が捕れるんですか？」。「びんちょうマグロ、知ってるだろ」。<びんちょう鮪>と聞いて意外だった。マグロなどは、もっとなんとなく沖の太平洋の真ん中にいるような気がしていたのだ。

そもそも、この爺は何者だ。乗っているのは汚いチャリ、早朝の散歩者なのだろうか。その爺との雑談もじきに終わって、後姿を目でおった。…なるほど、沖を頻繁に行き来していたのは、漁船なのか。朝っぱらに、仲間と魚を捕って、すぐ近くの銚子港へ売りに行く。漁師、自分のまったく想像もつかない生活をしている人間たちだ。世界は不可解、でも、俺の知ったことではない！ 奴らだって、俺の生きている世界は不可解なのだ。

御影の腰掛石の前にしゃがみこんだ。柵に両肘をついて、顎を両手の手のひらに、あるいは、手の甲にのせたりしながら、少年の気分になって、沖を眺めた。辺りを見回しながら、少しぶらぶら歩いたり、ビスケットを齧り、ペットボトルの水を少量ずつ飲んだ。人影がないのを見計らって、おしっこ缶に用を足したりもした。退屈なような、無駄なような、意味のないような、それでいて、かけがえのない貴重な時間なのではないかと思ったりもした。

時計を見た、十時半だった。十一時半までは粘るつもりでいた。その一時間が長かった。要するに、六時から撮り始めて四時間半以上すぎている。体力的にも気力的にも、長時間過ぎる。精神が散漫になっていたのだろう。撮影画像のモニターも、かなり雑、おざなりになっていた。撮影しているのか、時間を消化

しているのかよくわからない状態。要するに、最後の方は、ぼろっとしていたのだろう。

雲一つない青空、快晴の浜辺で五時間半、写真を撮りながらも、とりとめのない時間を過ごした。昨日のような暑さ、不快は感じなかった。まずもって、海からの風がかなり吹いていて、暑さを和らげてくれた。日射は最大限に厳しかったが、準備と心構えが違った。なんとかやり過ごした。

三脚をたたみ、カメラバックを背負った。五、六歩行きかけたところで、振り返った。忘れ物はないな、念のための行動が自動化している。忘れ物の確認をしないで、一度ならず痛い思いをしているのからだ。砂地を歩いて、高台の駐車場へ向かった。これが意外に体力を消耗する。長い急な階段がきつかった。疲れている。四時起きして動き回っているのだから、当然だ。

車の中は蒸し風呂状態だった。すぐにエアコンを入れて、窓にシールドを張った。ズボンやパーカなども脱ぎ、すぐに横になった。一応、耳栓もした。車のエンジン音が小さくなった。眠ろうと思った。苦労せずに、そのうち、起きているのか寝ているのかよくわからない状態に陥ったようだ。夢心地。…蒸し暑くて不快、エアコンを強くした。またうとうとした。

目が覚めた。二時過ぎだったかもしれない。とたんに大きなくしゃみ、五連発。これは、アレルギー性鼻炎の発作で、非常によくない。というのも、自宅なら<ザイザル>を飲むという選択肢もあるが、眠気とだるさがきついで、旅の間はできるだけ

飲まないようにしたいわけだ。ま、さいわい、世の中、マスク着用が常態化しているので、最悪の場合は、ティッシュで鼻栓をして、しのぐこともできる。

さっと身支度をして、サンダル履きで車の外に出た。疲労が少し回復している。一応、カメラを一台首にかけた。犬吠埼灯台を、広場やや右からスナップするつもりだ。時間的には、午後の光になっていて、思ったとおり、やや赤っぽくなっている。ま、いい、これも一興だ。

<テラステラス>に入った。窓際のカウンター席に座って、昨日と同じカレーを食べた。と、斜め後ろで、中国人か、大きな声でしゃべっている。振り返ると、ソフトクリームをほおぼった、間抜けな面の若者だ。むろん、咎めるつもりなどはない。が、その後すぐ静かになり、いつの間にか、その一団はいなくなっていた。

すぐに食べ終えて、トイレに寄った。少し排便して、温水で洗浄してすっきりした。ただ、コロナ菌のことが頭から離れず、念入りに手を洗った。きれいな施設だが、トイレに関しては、話は別だ。この時期、外で排便はしたくなかった。神経質なところがある。それに、同じ行動を繰り返す習性もある。同じものを、同じ場所で食べるのがよくあった。

さあ、午後の撮影の開始だ。一番暑い時間帯は、昨日撮った。今日は、そのあと、二時半から日没前の五時半までにしよう。三時間の撮影が関の山だ。それ以上は冗長、散漫になってし

まう。都合のいい理由をでっち上げた。

ほぼ予定通り、午前と同じ場所に、同じように二本の三脚を立て、五分間インターバル撮影を始めた。太陽は西に傾き始め、暑いというほどでもなく、アウトドアが快適だった。カメラと灯台の間にある波打ち際は、大賑わいだった。次から次へと、登場人物が入れ替わった。

小さな子供連れの家族が多かった。それにカップル。ときには高校生の男子だけの集団、小学六年生くらいの仲良し少女たちもいた。真っ白な灯台が、徐々に西日に照らされ、染まっていくことを期待した。が、そういう現象は起こらず、海を撮っている望遠の方も、快晴ゆえに、空にもまったく動きがない。

いきおい、写真撮影よりも、波打ち際で遊んでいる人間を見ていることが多くなった。記憶に残っているものだけでも、記しておこう。小さな女の子、赤いボールが波にさらわれた。思い切って自分で取りに行こうとして、波の中に沈んだ。すぐさま、メタボ体形の父親が、意外にも俊敏な行動で海の中に走りこみ、幼い娘を救い上げた。

小型犬を散歩している女性。寄せ波に、ワンコは逃げようともせず、そのまま波につかる。そして、引き波の中、しゃがみこんで気持ちよさそうだ。それを幾度となく繰り返す。飼い主の女性が笑っている。大きなストローハットをかぶった若い女性、二人連れ。ひとりは、ヒールを手に持ち素足で波打ち際を歩いている。そのほか、あとからあとから、小さな男の子や女の子が走

って登場、波打ち際で歓声を上げている。孫を見守るじいちゃんたち。

一番絵にならないのは、若い男の二人連れ、さらにいただけなのは、男の若者が一人。波打ち際は、やはり女性や子供たちの場所だ。・・・そう言えば、地元の老サーファーが、波間に浮いていたな。一、二回、波に乗ったものの、すぐに見えなくなり、また波間に浮いている。良い波を探しているようにも見えるが、なにせ、サーフィンをするような波じゃない。この、やや長髪の爺は、昨日、遊歩道を散歩していた。さぼけた爺さんがいるなど記憶に残っていた。サーファーだったのね。

・・・陽もだいぶ傾いてきた。陣取っている柵の下、波打ち際に、先ほどの女の子仲良しグループが、インスタにでもあげるのか、スマホで自分たち写真を撮っている。距離的にも近く、要するにすぐ目の前なので、いやでも目に入ってくる。確か四人いたと思う。体つきからして、中学一年生くらいか。海を背にして、三人が並んでポーズを取り、ひとりが撮る。これを交互に繰り返している。写真が撮れたら、ワッと走り寄って、みなでスマホを囲む。実に楽しそうだ。

そのうちは、白っぽい風船を膨らませて、それぞれが手に持つ。シャッターチャンス、念入りな打ち合わせをして、全員で指を立ててカウントする。と、ひとりの風船が割れて、中から何やら、小さな金色の星のような物が、ぱっと飛び散る。なるほど、面白い演出だ。これを交互に繰り返す。時間なんか関係ない。今の彼女たちに時間は存在しない。見ているだけで、こっちまで楽

しくなった。

とはいうものの、それが、妙な具合になってきた。女の子のうちの、誰かのお姉ちゃんなのか、茶系チェックのスカートに白ワイシャツ、痩せ気味の女子高生がどこからとも現れた。女の子たちを並ばせ、スマホで写真を撮ろうとしている。ポーズの注文など、こまかく指図している。そのあと、スマホを覗いて何やらやっている。その時間が、いやというほど長い。その間、女の子たちはおしゃべりするでもなく、シーンと、神妙に待っている。先ほどの快活な雰囲気はなくなり、白けた感じだ。

女子高生の方は、そんなことにお構いなし。ようやく、スマホから顔を上げ、またあれこれ長い指図をして、スマホを覗きこむ。その繰り返した。このあとどうなるのか、すこし気になったが、これといった動きもない。次第に飽きてしまった。こんな状態がかなり続いたのだと思う。あたりがだいぶ暗くなってきた。

今日は、灯台に灯がともる前に引き上げようと思っていた。灯台からの光線が撮れない以上、夜の灯台と対峙する意味はない。ふと下を見ると、女の子四人が、うす暗くなってきた海を背にして、まだ座っている。が、ひとりの子が、最後の風船を、合図とともに割ろうとしている。また、快活な声が浜に響いた。女子高生と一緒に指を折りながら、ついに風船が割れた。金色の星屑が、彼女たちの頭に降りかかった。この瞬間を撮りたかったわけだ。それにしても、写真一枚撮るのに、何十分かかっているんだ。ま、余計なお世話だな。

女の子たちは、ワッと女子高生のもとに走り寄り、スマホを覗きこんで、歓声を上げる。うまく撮れたのだろう。やっと解放されたと思ったのは自分だけではなかった。みなして風のように砂浜を走り、灯台の方へ消えて行った。そうそう、立ち去る前に、飛び散った金色の星屑を拾っていた。浜を汚さないような躰がされている。やはり、地元の子たちだ。ちなみに、この<君が浜>は<日本渚・百選>に選ばれているようだ。

人生の、一番楽しくて、美しい、高貴な時間を、今この瞬間、自分たちが生きているなどとは、おそらく思わなかったにちがいない。だが、少女たちよ、いずれそのことがわかる時が来る。それが年を取るということだ。

#### <灯台紀行・旅日誌>2020#14 犬吠埼灯台編

…浜に人影がなくなり、灯がともる前の灯台も、薄暗がりの中で佇んでいた。五時半だ、引き上げよう。三脚をたたみ、カメラをバックへおさめた。そうそう、書き忘れていたことがある。午後の休憩のあと、高台の駐車場から浜を見下ろした時のことだ。車が何台か閉鎖されているはずの浜の駐車場に入りこんでいる。あれ、駐車場の開放は、明日からだっただけだ。ようするに、<30日より開放>と告知されているので、早めに開けたのだろう。職員がわざわざ、午前零時に開けに来ることもない。その辺は柔軟というか、お役所仕事だ。ま、こっちにとっては都合がいい。機材を運ぶ手間が省けるわけだ。

昨日、一昨日と、夜の八時近くまで写真を撮っていた。今日は



まだ六時前、気が楽だった。途中、旭市の市街地で、ガソリンを補給。旅に出る前に満タンにしてきたが、もう半分以上使っている。値段的には、さほど安くもなかったのもので¥1000 だけ入れた。これで十分だ。けちくさい根性は一生なおらないだろう。

宿に着く前に、コンビニに寄った。同じ店に、今日で三回目だ。まず、ブドウパンに牛乳、それにカツ丼弁当を買った。初日は食欲がなかった。だが、今日は腹が空いたような気がする。宿に着いたのは七時前。いつものようにすぐ着替えて、温泉に入った。こちらが今日が三回目だ。一応どうでもいいことだが、もっとも、どうでもいいこと以外に、書くことがあるとも思えないが、とにかく、一日目は、こちらに背中を向けた若い男が、湯船につかっていた。自分が入っていくと、それまでは寛いでいた感じなのに、そくそく出て行った。ま、こっちも一人の方がいい。

二日目は、風呂場の入口、下駄箱のところで、おばさんにぼつたりでつくわした。黒っぽい服を着て、愛想のないのっぺりした顔、猜疑心が目に出ている。よく出くわす人間の表情で、要するに警戒心や嫌悪感が丸出した。目礼もしないですれちがった。

他人を嫌な感じにさせる表情は、それだけで罪だと思う。自分もそういう時期があった。まずもって、額にしわを寄せ、目が険しい。人生が不幸なときだ。ある時そのことに気づいて、なるべく、＜愁眉＞を開くように心がけた。少しはニュートラル表情になったのか、ま、今はそれほど不幸でもないもので、嫌な表情はしていないと思う。

三日目は、誰にも会わず、ゆっくり温泉につかった。湯船はさほど気にならなかつたものの、さすがに、ドライヤーを使う時には、コロナ菌が気になった。もっとも、あたり一帯、足ふきのバスマットも、脱衣カゴも、安全とは言えないだろう。

なるべく、物に触れないようにして、部屋に戻った。ノンアルビールを飲み、カツ丼弁当を食べた。レンジでチンすれば、もう少しうまかつたかもしれない。だが、風呂場へ行く途中の、うす暗い物置のような場所に鎮座ましますレンジを、使う気にはなれなかつた。

食事が終わり、布団にごろっと横になって、小さな画面のテレビを眺めた。まったく興味が持てず、八時になったので、部屋の電気を消した。あっという間に眠つたのだと思う。ま、静寂だけがこの宿の取り柄なのだ。

四日目。

翌朝は、四時に目覚めた。昨日、八時に寝たのだから、八時間寝たわけだ。そういえば、体も軽い。疲れが取れたような気がした。すぐに支度をして、部屋を後にした。と、その前に、一応、忘れ物がないか、冷蔵庫の中、クローゼットの中などをのぞいた。むろん、というか、性格だろう、布団もたたんで、そのうえ、流し周辺なども軽くふいて、部屋の原因復帰を果たした。

…宿から立ち去るときに、よく思い出すことがある。もっとも、今回は思い浮かばなかつたが。二二六事件の兵士たちが、一晚泊つた宿を去る時、布団もちゃんとたたんで、部屋をきれいに

して立ち去ったという、ウソかホントか定かでない逸話だ。

…その後、極秘事項の漏洩を防ぐためだろう、兵士たちの、軍隊内における処遇は過酷を極めた。ということは、後になって知るのだが、逸話を聞いた時には、皇軍兵士とは、そのようなものかと思って、印象に残っている。だが、いま思えば、上官の命令だったのかもしれないし、あるいは、残酷、残忍な内務班で、整理整頓を徹底的に教育されていたからかもしれない。ま、今更、興奮しても仕方ない。老人の繰り言だ。

例の黄色のプラカゴに、使用済みのタオルなどを入れて、部屋を出ようとした。ふと思いついて、室内の写真を数枚撮った。旅の記念だ。連泊の最後の日だから、鍵は掛けなかった。もう来ることもあるまいと思いつながら、エレベーターで一階に下りた。

まだ朝の五時すぎだというのに、受付には、穏やか感じのばあさんがいて<ありがとうございます>と言われたような気がする。鍵をカウンターの上の小さな箱に戻して、自分も口の中で<ありがとうございます>と言ったような気がする。

車に乗り込んだ。今日が最後だと思うと、朝っぱらから元気が出てきた。そうだ、飯岡漁港をちょっとのぞいてみよう。先日行ったときはコロナの影響で立ち入り禁止だった。

少し走ると、大津波で立ち往生した自動車から映した、道沿いの民宿が見えた。外観はあの時のままだったような気がする。と、手前を左折して、すぐ左手に<いいおか公園>。前方に

は高い堤防が見え、その上に人がたくさんいる。釣りをしているのだ。

車をどこに止めようかななどと思いながら、行き過ぎてしまい、ユーターン。堤防近くの広い道に路駐。カメラを取り出し、付近の風景などをスナップした。とくに、刑部岬の断崖の上に立つ、飯岡灯台と展望台を、しつこく撮った。モノにはならなかったけどね。

少し歩いて、堤防に斜めに掛けてある、たしかアルミ製だったかな、危なっかしい梯子を数段上る。と、そこはかなり幅広の道？堤防の上に出た。あとで知ったのだが、この場所は釣りの名所らしい。それにしても、写真を撮る場所がないほど盛況。まだ朝の五時過ぎだぜ！

釣り人たちの間を歩いて、空いているところを探した。柵越しに太平洋の、何もない海と空を一枚撮った。あの向こうから、大津波が押し寄せてきたのか、という感傷に浸れるような状況でもなかった。要するに、朝っぱらから活気があって、みんな釣りに夢中だ。

これといった収穫もないまま、車に戻った。だが、往生際が悪く、またしつこく、逆光の刑部岬、豆粒みみたいな灯台と展望台を撮った。撮れた気もしなかったが、なぜか気分は上々だった。

<灯台紀行・旅日誌>2020#15 犬吠埼灯台編

ナビをセットした。犬吠埼灯台、君ヶ浜、東側駐車場へ向かった。ちなみに、ここは初日に下見していて、ぜひとも撮影しようと思った場所だ。つまり、灯台の先端から、弓なりに広がっている君ヶ浜の、ちょうど反対側で、距離はあるが灯台に正対できる可能性があるのだ。何を言っているのか？要するに、灯台の垂直を出すには、灯台に正対するしかないし、そうでない場合、灯台は、必ず傾いでしまう。

そういう場所で、無理に灯台を垂直にすれば、今度は天地が傾いてしまう。…人間の目は、実際には傾いでいる灯台を、あるいは、斜めになっている水平線を、頭の中で修正して、垂直、水平にしてしまう習性がある。写真を撮るときには、要注意だ。

その点カメラは、律儀すぎるほどの正確さで、傾いているものは傾いたまま、斜めになっているものは、斜めのまま、写し撮る。とはいえ、カメラは、レンズ口径や性能に影響され<収差>という専門用語すらある。

要するに、水平線に直立する灯台などというのは、頭の中ででっち上げたイメージで、厳密に言えば、実際には存在しないような気もする。ただ、懲りない抵抗として、被写体に正対すれば、垂直は取り易いということだ。これは経験値ですな。

…灯台写真を、最近ネットでたくさん見ている。灯台が<ピサの斜塔>のように傾いている写真が数多くある。自分としては、かなりの違和感がある。とはいえ、それは、人それぞれの感覚的なことで、たとえ傾いていても、その人にとっては、問題

がない場合もあるのだろう。ただ、自分の場合は、屹立する灯台、垂直に、すっと立つ灯台の姿に魅力を感じるわけで、それなくしては、灯台を撮る意味がなくなってしまう。

だから、ま、あとで書くが、撮った後の落胆が大きい。つまり灯台が傾いているのだ！その結果、その後の綱渡りのような修正作業が、半端なく膨大になる。かなりうんざりだが、傾いたままの灯台を許せない。念のために言っておくと、これはあくまでも、自分だけの問題であり、他人様の写真を、とやかく言っているのではない。それほど偉くない！

さてと、話が、きわどい感じになってしまった。四日目の旅日誌を続けよう。…君ヶ浜の、東側駐車場はさほど広くもなく、下は砂場。高さ 1m くらいのコンクリ護岸の前に、ぴたっと車の鼻面をあわせた。そこは、護岸が切れたところで、脇から砂浜へと入ることができる。

できることなら、そうだな、砂浜よりは波の打ち寄せる岩場まで進攻したいところだ。例の垂直の話で、弓なりになっている浜の、灯台とは反対側の頂点が最高なわけだ。だが、そうもいきまい、カメラに波しぶきでもかかったら終わりだ。だから、ぎりぎりのところを選択して三脚を立てた。

そばに転がっていた、丸くて黒いプラスチック、これはブイだろう、ちょうどいい、腰掛に使える。三脚の後ろに置いて、インターバル撮影の合間、そこに腰かけた。幸運なことに、今日も晴れの予報だった。はるか彼方の灯台を見ながら、誰にも煩わさ

れず、撮影を続けた。

といっても、九時を過ぎたころから、浜遊びをする人が増えてきた。小さな男の子を連れた楚々とした感じの女性、子供と一緒に砂浜の貝殻を拾っている。ほかにもいたが、よくは思い出せない。そう、あとは海の中、波間に例の老サーファーが見えた。

…今調べたら、四日目の撮影は、七時半からになっていた。五時に宿を出て、飯岡漁港に寄って、それからひと走りして、いまここにいるわけだ。もっと早くに着いたと思っていた。のんびり、時間に関係なく動いていたとみえる。

ふと思って、携帯で楽天トラベルを検索。保険として最初に予約して、そのあとキャンセルした銚子市内のビジネスホテルをみた。お、今日、空いている。迷うことなく予約した。というのも、この後、まだ見るべきところが残っていたのだ。

<地球が丸く見える丘展望台>それに<銚子タワー>。午後から、それらの施設を回って、そのあと190キロの道のりを帰るのか、と思うとちよっとうんざり、無理だよな。ニャンコもいないし、もう一泊していこうという気持ちになったわけだ。ちなみに、連泊した宿の方は検索もしなかった。もう泊まるつもりはない。

…旅の日程を変更したことは、おそらく今回が初めてだ。<自由>を感じた。カネのことも日程のことも二の次で、思いつきで旅を楽しんでいる。そう今にして思えば、算段して旅に出ても、いつもカネと時間に縛られていたのだ。

一応、娘にだけは、もう一泊すると連絡しておいた。泊まるホテルの名も伝えた。と、そばに、ちょっと前からたたずんでいた中年男性に話しかけられた。少し前から気配は感じていたのだ。

携帯が終わるのを待っていたかのように、丁寧な感じで、写真のことについて聞きたいと言う。お、と思い耳を傾ける。最近ニコンの 5600 を買ったものの、どうも使いこなせない感じなんです。なるほど、こっちがニコンのカメラを二台、三脚に立てているのを見て、話しかけてきたんだな。

ま、それから、いろいろと、小一時間話した。こっちも暇だったし、インターバル撮影にも多少飽きていたのだ。彼の方も、駐車場が解禁されたので、久しぶりに一人で海を見に来たのだ、とか言っていた。自分から、五十過ぎとちらっと漏らしたが、独身かどうかはわからない。仲間とバイクでツーリングなどもして、行った先の景色をきれいに撮りたいらしい。

ま、偉そうに、少し初歩的な写真のテクニックを伝授した。とはいえ、あとでよく考えてみると、でたらめを教えたような気がする。申し訳ない！この場をかりて、丁重に謝りたい。

帰り際に、彼が、いまここで撮っている写真が、ネットにアップされるんですね、楽しみです、というようなことを遠慮がちに言った。おっと思い、名刺の裏に、投稿サイトの名前とハンドル名を書いて渡した。白っぽいシャツに黒っぽいズボン、地味な感じの少し小太りの、人のよさそうな男だった。



時計を見た。十時半だった。十一時半まで粘るつもりだったから、あと一時間かと思った覚えがある。撮影を続けながら、今日の午後、そして明日の予定を、頭の中で考えた。

ここを、十一時半に撤収して、＜地球が丸く見える丘展望台＞へ行く。すぐ近くだから、移動にさほど時間はかからない。問題はその後、展望台からの撮影だ。撮影場所はワンポイントだろう。要するに、そこから犬吠埼灯台が見下ろせるかどうかにかかっている。ま、それでも、行って帰ってきて、二時間あれば十分だろう。

戻ってきたら＜テラステラス＞でカレーを食べる。それから＜銚子タワー＞へ行き、望遠で灯台を狙う。五時前に引き上げ、ここに戻ってきて、夜の撮影。撮れなかった灯台の光線に、もう一度挑戦してもいい。それから、明日の午前中には晴れマークがついているから、帰る前に君ヶ浜を少し散策してみよう。ざっとこんな感じだ。

…午前中の撮影は、どこか集中力に欠けていたな。だが、もういいだろう。少し観光気分になっていた。三脚をたたみ、機材を車の中に収め出発した。

## ＜灯台紀行・旅日誌＞2020#16 犬吠埼灯台編

灯台を見下ろす高台にある＜地球が丸く見える丘展望台＞には、すぐに着いた。コロナ禍でずっと休館していて、今日から再開。駐車場がずっと下の方だから、重いカメラバックを背負

いくふれあい公園>の中をうねうね歩きながら、展望台を目指した。

施設の中に入ると、思った通り、と言うのは駐車場に車が二、三台しか止まっていなかったからだが、閑散としていた。売店に人影はなく、受付の女性が一人いるだけだ。生年月日を言っ、て、シニア割¥360。高いのか安いのかよくわからない。エレベーターに乗って、展望ラウンジへ行った。休憩所のようなものがあり、長い机に椅子がたくさん並んでいた。人影はない。ベランダに出ると、たしかに、太平洋が一望だ。

とはいえ、お目当ての灯台は、なんとも間抜けな話で、黄色っぽい二階建ての民家にさえぎられ、ほとんど見えない。なんで、と言いたいほど、ベストポジション？にその大きな家はあって、故意に、灯台を見せまいとしているかのようだ。

だが、せっかくだ。望遠を取り出し、ベランダの仕切り壁に寄りかかりながら、撮り出した。まったくもって、写真にならん！灯台の白い頭だけが、ちょこんと民家の横から飛び出ている。その向こうは太平洋、そして水平線だ。

撮っているあいだ、二、三組、若いカップルや家族連れがそばまで来たような気もする。が、やや機嫌が悪かったので、よく覚えていない。こりゃだめだな、とすぐに諦めた。観光気分でベランダを半周し、太平洋を眺めた。HPのうたい文句通り、水平線が少したわんでいる。だからと言って、どうということもない。

徒労だったな、と思いながら、エレベーターに乗ったのだろうか、施設の外に出て、公園の階段を下りた。…今この施設のHPを見た。海を背にした、犬吠埼灯台の写真が掲載されている。これは空撮か？それとも民家ができる前の写真なのか？そう、たしかにこの写真を来る前には見ている。だから行ったのに、いっぱい食わされた！

広い駐車場は、日差しが強くて、車の中はひどく暑かった。もしかしたら、と思いながら、高台を下りながら、辺りをきよろきよろした。どこか、民家の下に、見晴らしのいい場所はないのか。…なかった。

朝から、ブドウパンと牛乳しか腹に入れていない。昼食の時間はとっくに過ぎている。そうだ<テラステラス>でカレーを食べるんだ。ひと息入れて、次の行動へ移ろう。今日は夜の八時頃まで写真を撮るつもりだった。

犬吠埼灯台前の商業施設<テラステラス>は、できたばかりなのか、きれいで、混んでなくて気持ちがいい。たが、昨日に比べ、灯台周辺の広場には人影が多い。県外ナンバーもちらほらで、観光地の雰囲気に戻ってきた感じだ。

この旅の習慣。昼食にカレーを食べ、きれいな温水便座で用を足す。さてと、今度は<銚子タワー>だ。ナビをセットした。…そう、銚子タワーに関しては、行く前から、さほど期待していなかった。HPに掲載されている、民家の屋根越しの写真は、どう見ても超望遠で、自分の400mmでは無理だろうと思ってい

たからだ。

浜での午前の撮影でも、その合間に、真後ろを振り返り<タワー>を目視、そのまま回れ右をして、今度は灯台を目視。なるほど、<タワー>展望台の右端からなら、左端かな？灯台が見えるはずだ。ただ、距離がかなりある。今でさえ、かなり遠目の灯台だ。期待はできない。だが、一度は行ってみるべきだよな。

<銚子タワー>にも、ナビ通り、すぐに着いた。さして広くはない駐車場に、数台の車が止まっている。施設に入ると、薄暗い売店、そして受付の女性が一人だけ。ここでも、さっきの<地球・・・展望台>とおなじく、生年月日を言って、シニア割り¥360。両方とも市の施設なのだろうか、何もかもよく似ている。

エレベーターで、かなり高いところまで登った。展望室は、ぐるっとガラス張りで、360度見渡せる。あ、あった。犬吠埼灯台だ。でもねえ～、あまりに遠すぎる。いちおう、来場者に気をつけながら三脚を立てた。遠目とはいえ、撮影ポイントは、この場所以外にない。HPの写真も、この位置から撮られたものだろう。何枚か撮った。ガラス越しの撮影は<スカイツリー>で経験積みだった。

しかしながら、灯台は民家の屋根越し。それに、思った以上に遠い。ま、あとは、トリミングと補正と修正でどのくらいできるかだが、帰宅後に、何をやっても、全然モノにならないことが判明した。やはり、400mm程度の望遠では無理だったのだ。惨

敗。

あっさり、犬吠埼灯台はあきらめた。ほかに何かないかと、展望室をぐるっとひと回りした。銚子漁港とか、古い船とか、いい眺めだ。それに、西側の方に、防波堤灯台などがいくつか見える。中でも、その時は名前を失念していたが<銚子港一の島灯台>というのが、小ぶりながら存在感がある。

…再度、今調べてみると、灯台マニアのサイトには、地上からの写真もある。丁寧なサイトで撮影場所まで明記してあった。それに、出所は忘れたが、この灯台が大波を受けている写真があったはずだ。いい写真で印象に残っている。

というわけで、時間もあるし、この灯台と、そばにある防波堤灯台なども撮ろうと、ガラス越しに三脚を立てた。ところがだ、その場所の後ろにはベンチのような腰掛があり、ま、それはそれでバックなどを置くには便利なのだが、通路が狭くなってしまう来場者の邪魔になる。

不運？は重なるもので、さほど混んでもいなかったのに、にわかにかに、次から次へと人が通り過ぎる。そのたびに道をあけたり、場所を移動したりした。おちおち写真など撮ってられない。いま思えば、夕日に海が染まるのを期待して、インターバル撮影を試みたが、しょせん、場所的にも、時間的にも無理があった。

ま、その時は、そのことには気づかないで、子供連れの家族が

大声で話しながら、二回も巡ってきたことに、やや不機嫌になった。しかも、あろうことか、三脚の横にあった、有料の双眼鏡を子供が覗きたがり、駄々をこねているのだ！

ま、いい。話を灯台のことに戻そう。まさに高みの見物撮影だった。だが、写真的には、これもあとで思ったことだが、あまりよろしくない。端的に言って、平板になる。今回の場合、望遠という要素も加わるので、ちなみに望遠レンズでは画像が圧縮され距離感がなくなる、より一層奥行き感のない、のっぺりした写真になってしまった。

これは、遠近感が重要な、風景写真では致命的だろう。理想は35ミリくらいで、被写体に近づけるだけ近づいて撮ることだ。誰の言葉か、どこで読んだのか忘れたが、奥行き感ということに関して言えば、35ミリ前後が、自分の貧しい経験からしても、一番有効だと思う。

ま、それはさておき、こう人が多くちゃ、三脚なんか立ててられない。いうわけで、そばにある赤い防波堤灯台や、その隣の白い突堤灯台なども、手持ちで撮り出した。撮れているのか撮れていないのか、なんだか、かなりでたらめな、乱暴な撮影になってしまった。

…その〈一の島灯台〉の後方、というか斜め右上から、一台のモーターボートが現れた。海の上を疾走している。灯台を横切る瞬間、少し左側に行ったところなどでシャッターを切った。ありきたりの構図だ。…〈荒川〉を撮っていた時も、よくモータ

ーボートを見かけた。モーターボートに乗ったことは一度もないし、乗りたいと思ったこともない。が、ふと、ああいう乗り物に乗っている人間のことを思ったことがある。金持ちなのだろうか？それとも遊び人なのか？いずれにしても、自分とは違う種族だ。とはいえ、心の底では羨望と嫉妬が微かにうごめいていた、というのが正直なところだ。だが今日は、疾走するモーターボートを見て、アホやな、とは思わなかった。低俗な人間にはなりたくないが、自分だって、そんなに高尚な人間じゃない。大して変わらない。

さあ、時間だ。ひきあげよう。エレベーターに乗って下まで降りた。車に乗り込んだ。五時前だった。これから、夕方の撮影が始まる。念のため、ナビを犬吠埼灯台にセットして出発した。

途中、道沿いの、海が見える、ちょっとした駐車スペースに車を止めた。なにをしたんだっけ？夜の寒さに備えて、ヒートテックでも着込んだのか、それとも、腹ごしらえに、何か持参していたお菓子でも食べたのか、しかとは思い出せない。ただ、フロントガラスの向こうに広がる、少し暗くなった海を見て、一瞬、こんな光景、前にも見たことがあるな、と思った。

### <灯台紀行・旅日誌>2020#17 犬吠埼灯台編

君ヶ浜の東側駐車場に戻ってきた。辺りは少し暗くなっていた。車が数台止まっている。朝方の撮影の際に現れた、耐えがたい騒音の、族っぽい二台のバイクが、またやってきた。朝方は、狭い砂地の駐車場を我が物顔で走り回っていた。今回は、あ

っさり、すぐに行ってしまった。うるせいなあ〜と思ったものの、ひょっとしたら、奴らの縄張りだったのかもしれない。

撮影機材を車から下して、護岸の切れたところから、浜辺に入った。午前の撮影同様、岩場と砂浜の境あたりに三脚を立てようと思った。だが、気が変わった。

護岸の下は、コンクリの段々になっている。そこに腰をおろして、三脚を短めにセットした。要するに、段々に腰かけたまま、撮影しようというわけだ。立ったり座ったりする必要もないから、これは楽だ。もともと、ずっと腰かけてもいられないので、インターバル撮影の合間に、立ち上がったたりもした。

それはともかく、カメラを構える位置が、灯台から少し右にずれた。灯台の垂直だとか正対だとか、厳密に言えば、位置取りが甘くなった。暗くなってきた辺りの景色同様、頭の中も暗くなっていたのだらう。

ただ、よく覚えていることは、灯台からの光線を写真に撮ること。メモしてきたことはほぼ無効で、完全な真横一文字は望むべくもないが、何とか工夫して、光線をモノにしようという、ある種の意気込みだ。朝五時に起きて、一日中動き回り、それでもなお元気だった。完全にハイになっていた。

五時半過ぎから撮影したのだから、あっという間に暗くなってきた。灯台に明かりが灯った。ちらちらと、光線が見え始めた。じきに辺りは真っ暗。持参したヘッドランプを頭に装着した。こう



していれば、暗がりでごそごそしていても、他人に怪しまれることはないだろう。小心者！よけいなことを考えすぎだ。

バタバタと、カメラ操作などしているうちに、ついには漆黒の闇。下からの照明を受けた灯台だけが、ぼうっと浮かび上がっている。その明かりの影が、暗い夜の海を微かに照らしている。時々、灯台正面の駐車場に出入りする、車の赤いテールランプが点滅する。

どう考えても、一秒では、光線はとらえきれない。ためしにと、十五分の一秒、続いて三十分の一秒、さらには五十分の一秒とした。お、かすかに写っている。調子に乗って、八十分の一秒にする。やや物足りない。なるほど、五十分の一秒か。ホントなのか？

しかし、これでは光線が短すぎる。イメージとしては、灯台の目から暗闇へと、長い光線が欲しいのだ。でもね～、そんな光線は目視できない。だからこそ、何か特別な方法が必要なのだろう。それが技術というものだ。

だが、ありていに言えば、その技術を習得するには、あまりに年を取りすぎてはいないか？いや、年など関係ない。是が非でも、という強い気持ちがあるなら、やれるはずだ。きれいごとじゃないのかな？

とここまで来て、灯台からの、真横一文字光線が是が非でも必要だとは思えなくなってきた。つまり、光線は一種の絵面でも

あるわけだ。問題は絵面ではなく、心意気が欲しいのだ！言葉に酔っている。いまの段階では、光線は撮れない。それだけでいい。

変な納得の仕方だった。とはいえ、気持ち的にはすっきりした。今やれることはやったのだ。何と言われようと、ま、後悔はない。こうして四日目の夜の撮影が終わった。灯台からの、少しばかりの光線が撮れたことに、十分満足していた。

お決まりのようにナビをセットして、銚子市内のビジネスホテルへ向かった。暗い夜道を、どこをどう走ったのか、じきに広々とした市街地に出た。銚子市のメインストリートみたいだ。

ご丁寧なことに、ホテル近くのコンビニもナビで調べていた。道沿いにあるのですぐにわかった。おにぎり三個、唐揚げ、牛乳、ブドウパンなどを買った。ホテルの駐車場は有料パーキングのようになっていた。とはいえ、通行フリーになっているので、バーは上がったまま。建物が大きい割には、車はさほど止まっていない。

明るい、きれいな入口、受付には若い女性が二人いて、ビジネスライクな対応、前金で¥7700 払う。カードもらい、エレベーターに乗った。部屋は二階、廊下も広い。

連泊した宿とは、何もかもが違う。キーじゃなくてカードだ。ま、今日日、当たり前だろう。そのカードをドアノブの下に当て、部屋に入る。明かりをつけようとして、壁際のスイッチを押した。反

応がない。…なるほど、壁にカードを差し込むポケットがある。

電気がついた。きれいだ、それに広い。喫煙ルームだったのだろうか、空気清浄機があり、つけると、こもっていたタバコの臭いが消えた。テレビもでかい。ベッドに横になりながら、見られる配置になっている。コロナ対策もされている。コップは紙で包まれていた。ま、これも当たり前だけどね。

値段だけのことはあるな、と思った。すぐに着替えて、広めの、きれいなユニットバスでシャワーを浴びた。むろん、温水便座だ。最初に入ったときに確認している。こうでなくちゃな、少し常識的な気分になった。

唐揚げをつまみに、ノンアルビールを飲んだ。おにぎりも三個食べた。おにぎりの味がした。名前を出してもいいだろう、街中のセブンだから、品物の回転が速く、その分、おいしいのだ、と納得した。

そのあと、ノートにメモを取った。要するに、何時に起きて、何をしたか、という程度のことだ。それだけでも、帰宅後の日誌にはずいぶん役立つ。細かい、数字的なことがまったく思い出せないことがしばしばあるのだ。

三十分くらいメモっていたら、なんだか眠くなってきた。夜の八時過ぎにチェックインしたことは、間違いない。だが、何時に寝たのかは定かではない。メモにも書いていない。ま、十時前には、確実に寝てしまったのだろうと思う。

そうそう、車に積んであったノート PC は一度も持ち出すことがなかった。何しろ、パソコンに向かう気に全然なれなかったのだ。それどころか、いつもの撮影旅行なら、宿での画像モニターは決まり事なのに、バックからカメラを取り出すことすらしなかった。かなり疲れていたんだらうな。

ベッドに斜めに横になり、テレビ画面を眺めていたような気がする。むろん、テレビなんか見ていない。うす暗くなった広い室内を見回し、ここを定宿にして、また撮りに来よう。春夏秋冬、季節ごとに同じ場所から撮る。犬吠埼灯台のロケーションは、予想をはるかに超えて、素晴しかった。

夜中に、何回がトイレに起きた。ジジイの習性だ。もう慣れっこになっている。はっきりと目が覚めたのは、朝の五時だった。茶色の分厚いカーテンを開けると、なんと曇り空！昨日の予報では、午前中は晴れマークがついていた。ため息をつきながら、空の様子をうかがった。雲は厚く、どう考えても晴れるような気がしなかった。

となれば、今日の撮影は無理だろう。もう少し寝ていようかな。いったんはベッドに戻った。が、完全に覚醒していて眠くない。ままよ、さっと起きて朝の支度。洗面、食事、排便。六時には、フロントにカードキーを返していた。もともと、朝早いせいとか、受付は、黒っぽい背広の中年男性だった。やはり、ここは、若い女性の〈ありがとうございました〉の声が聞きたかった。

## <灯台紀行・旅日誌>2020#18 犬吠埼灯台編

車に乗り込んだ。心づもりはできていた。要するに、君ヶ浜の散策だ。撮影場所が、今回の二か所以外にはないのか、例えば、弓なりにになっている浜辺の中間点はどうなのか？ナビをセットして、浜へ向かった。道はガラガラで、ほとんど貸し切り状態だった。

浜のほぼ中間地点に、道路を挟んで、広めの駐車場がある。車が何台か止まっている。空の様子は、いまにも降り出しそうな鉛色。写真は全く無理。だが、いちおう下見だ。軽い方のカメラを首にかけて、浜へ向かった。

朝早いのに、それに天気も良くないのに、浜の遊歩道には、ちらほら人影が見える。ふ～ん、朝の散歩かな。護岸のコンクリ段々で立ち止まり、一息ついて、じっくり辺りを見回した。ふむ、眼の先、少し右側、そこだけ岩場になって、海に突き出ている。

近づいていくと、自然の岩場ではなくて、人工的なものだとわかった。なぜこんなところに？防波堤としては小さすぎるだろう。意味をなさない。そのうち、これは灯台を眺めたり、記念写真を撮ったりするための場所だ、ということがわかった。

事実、三脚に都合のいい平な場所を探したり、しゃがみ込みこんで灯台の写真を撮るスナップしたり、要するに撮影の下見を終えた後、おそらく退くのを待っていたのだろう、若い女性が二人、今さっきまで自分のいた場所で、灯台を背に記念写真などを

楽しそうに撮っていたのだ

灯台との正対、ということに関しては、この人工岩場は、かなりいい。というのも、弓なりになっている浜の中間地点ではあるが、海に数メートル突き出ている分、少なくとも、西側の第一撮影場所、二日目・三日目と粘った場所よりも、灯台の傾度が修正されるはずだ。

ただし、構図としては、第二撮影場所、つまり浜の反対側と同じで、画面の下半分、ないしは三分の一は海になってしまう。ま、構図的には、波打ち際が入る、第一撮影場の方がよい。だが、何事にも一長一短はある。この場所を第三の撮影場と決めよう。

砂浜を少し歩いた。予想外に疲れる。歩くたびに、足の力が砂地に吸い取られるようだ。時計を見た。七時前だった。ほぼ一時間、撮影の下見をしている。急にぐったりした感じで、足が重い、体が重い。しかも眠い。駐車場へ向かいながら、この状態では運転できんな、と思った。

考えるまでもなく、すぐに車の窓にシールドを張り、仮眠スペースに滑り込んだ。車の出入りもなく、静かな駐車場だ。が、念のため耳栓もした。横になった途端、ふうっと、意識が遠のいた。旅の五日目、朝っぱら頑張りすぎたのだ。

うとうと、少し眠ったようだ。時計を見ると、九時ちょっと過ぎていたと思う。う～ん、一時間以上眠ったわけだ。窓のシールド

などを外しのだろう、車の外に出たのかもしれない。ともかく、思った以上に元気が回復していた。これなら、一気に帰れそうだ。

お決まりのように、ナビをセットした。到着地を自宅にしないで、東関道の大栄インターにした。つまり、圏央道が途切れている古いナビなので、来た道とは別の道を案内されてしまうからだ。ま、用心のためだったが、これが、ちょっとした失敗を招いた。

一般道をナビどおりに一時間ほど、うねうね走った。単調で、いささか飽きた。料金所のない元有料道路を過ぎ、そろそろ高速だ。広い道に出て少し行くと、左側に大栄インターの緑がかった看板、あれと思った。ナビは無言。

ナビが大栄インターまで導いてくれるものだと思い込んでいた。だから、まだ、高速に乗り損ねたとは思っていない。が、少し行って、広い道から、山の方へと続く狭い道に左折させられた。はは～ん、Uターンするのか、いやちがった。だんだんだんだん、道は細くなっていく。疑いながらも、ナビの音声に従った。

そしてついに、行き止まり。＜目的地に到着、案内を終わります＞だって！なるほどそうか、やっと事の次第を理解した。到着地に指定したつもりの場所は、実は大栄インターではなく、その付近の山里だったのだ。…タッチパネルで操作したのがまずかった。ちゃんと文字で入力して確認すべきだった。

あとの祭り、とはこのことだ。少し坂になったところで身動きでき

ない。このままバックで、Uターンできるところまで戻るしかない。車幅ぎりぎりの、少しカーブしている坂道、こういうのが、いちばん苦手なんだよ！緊張した、こんなところで脱輪するわけにはいかない。傷もつけたくない。慎重に、何回か切り返しながら、坂道をおりた。

単調な道の運転で、少しぼうっとしていたようだ。だが、これで目が覚めた。少し広くなった場所を利用してUターン、今来た道に戻った。やはりあの看板が正解なのだ。

山里から、のこのこ出てきた。目の前には、さっきの広い道路。むろん右折すれば、高速に入れるはずだ。幸い信号があり、青になるのを待った。長い信号だ。走り出すと、予想どおり、すぐに高速入口の緑の看板。ほっとした。・・・今回の旅で、道を間違えたのはこの一回だけ。帰路、少し気が緩んだのかな。

高速に入ってしまったえば、こっちのもんだ。もう、ナビなんかいらぬ。おとなしくしてもらった。来た時の教訓を生かして、律儀にパーキングごとに休憩をとった。東関道の大栄パーキング、圏央道に入って江戸崎パーキング、だが、ここからが長い。この先小一時間、パーキングはない。

とはいえ、100キロ未満の、のんびり高速走行。おかげさまで？眠くなることもなく、それほど疲れもせず、すんなり菖蒲サービスエリアに到着。県を二つまたいで、地元の埼玉だ。

菖蒲サービスエリアには、コロナ自粛中とはいえ、たくさんの車



が止まっていた。トイレ、それに少し体の屈伸。見回すと、ほとんどが埼玉県ナンバー。無事に戻ってきたわけだ。当たり前だ。たかだか、千葉の銚子までだ。これしきの旅で、参る筈がない。いや、まだ、参るわけには行かないだろう。

すこし気持ちを引き締めた。最後の数十キロの高速走行。今日は一つ手前のインターで降りよう。出口での料金が、少しだけ安くなっていた。そう、初日こそ、出費について書いたが、そのあと、ほとんどカネの出入りについて触れていない。気にも留めなくなっていたのだ。

高速を降りた。見知った一般道だ。自宅はもうすぐそこだ。時計を見た、一時を少し回っていた。仮眠した犬吠埼の駐車場を九時半ころ出発したのだから、四時間半かかっている。ま、何時間かかろうが、問題はない。疲労困憊していたわけでもないし、運転が苦行になっていたわけでもない。ちゃんと帰って来たのだ。

一時半には、自宅に戻った。玄関ドアを開けたとき、<帰ってきたよ、ただいま>と、もうお迎えすることも、足元でゴロゴロすることも無いニャンコに呼びかけた。

室内は変化なし。当たり前だろう。ベッドの背もたれに置いてある、ニャンコの白い骨壺に向かって、もう一度<ただいま>と言った。骨壺についている白いふさふさを、眉間をなでてやるように、軽く、やさしく撫でた。

やっぱり疲れた！後片付けは、明日だ。カメラバックと手に持てるだけの荷物は部屋に入れた。ベッドに倒れこんだ。だが、後ろをふり返って、いま一度、骨になったニャンコが入っている、白い骨壺をなでた。寂しい気持ちと自由な気持ちとがないまぜになった。

そのあと、口の中で<おやすみ>とつぶやいて、すぐに寝入ってしまったようだ。目が覚めた時には、もうあたりが暗くなっていた。

## <灯台紀行・旅日誌>2020#19 犬吠埼灯台編

エピローグ

2020/06/22(月)雨。本格的な梅雨だ。

五月の末日に帰ってきて、いまはもう、六月の二十日過ぎ。この間、いったい何をやっていたのか、ちょっと書き残しておこう。

帰宅後、二、三日は、使い物にならなかつた。というのも、旅の最中に発作を起こした<アレルギー性鼻炎>が悪化して、ザイザルを飲むようになったからだ。要するに、薬の副作用で、もちろん体も疲れていたからだろう、ひどい倦怠感に眠気だ。

何となく、ぼうっとしたまま、その後何日もかけて、旅の片付けや、それに何を思ったか、室内の整理だ。つまり、こたつ布団を片付けたり、夏用の衣類を出したりと、こまめに動いた。

帰宅後一週間ほどは、かような散文的な生活だった。だが、体の疲れも取れ、薬の副作用にも慣れてきて、次第に頭がはっきりしてきた。これからの予定、作業などを算段し始めた。

まずしなければならないことは、写真の整理だ。およそ 1000 枚撮っている。いつもの旅なら、モノになりそうな写真を選択、補正するだけで、ま、それでも手間はかかるが、それほど嫌だなと思ったことはない。むしろ、それが楽しみでもあった。

今回は話が違ふ。撮った枚数が多い。加えて、選択、補正する画像が、おそらく数百枚になるはずだ。というのも、前にも書いたが、五分毎のインターバル撮影を、二台のカメラで、ほぼ三日もしているわけで、なぜそんなことをしたのか？つまり、それらの写真をスライドショーにして、ユーチューブにアップするという野心？があったのだ。

…しけた野心だが、およそ 100 枚の写真の、30 秒間隔のスライドショーなら、約三十分の動画になる。これは<荒川写真紀行>と題して、エリックサティーを流したスライドショーで経験積みだった。

ということはつまり、どういうことになるのだろうか？今回撮影した写真は、そのほとんどがインターバル写真だ。少なく見積もっても 700 枚はあるぞ。要するに、三十分スライドショー七本分だ。

…どう考えたって、ここ数週間で、700 枚の写真の補正・加工

は無理だろう。ま、むろん、一か月とか、二か月とか、時間をかければやれないこともない。だが、こっちにも予定があるんだ。つまり<モロイの朗読>もあるし、月一回ペースと心づもりしている、次なる灯台旅もある。

写真の補正・加工に明け暮れるのは、二週間が限度だろう。ということで、今月の二十日をメドに、六月二週あたりから、本格的に取り組んだ。…そんなにあせらなくたって、ゆっくりやればいいじゃん、と言われそうだが、そうはいかない。

写真の補正・加工も大変だ。だが、それに並行して、旅日誌も書くつもりだ。こっちの方は写真と違って、新しい経験が脳に上書きされると、消えてしまいかねない。だから、次の旅に出る前に、ぜひとも書き上げておきたいのだ。

写真を補正していると、その撮った日のことが、なぜか頭に浮かんでくる。日誌を書くときに、写真は、非常に助かる。だが、これもできるだけ早い方がよい。五、六年続けた<入間川写真紀行>での経験だ。

…あの時は、ほぼ毎日撮影、その日のことはその日に書き記す、というかなりきついルールを自分に課していた。だが、そのおかげで、今があるわけで、文字を打つことが、さほど苦にならない。そればかりか、多少はこの<ディスクール>の時間を楽しんでいる。

ま、とにかく、心づもりしたのは、六月の三週までに、今回の旅

の写真、日誌を仕上げる。そして、四週目にくモロイ#15の朗読。そして、六月の後半、ないしは七月の初めには、二回目の灯台旅に出る、というプランだ。

と、ここまで書いてきて、ふと思った。〈エピローグ〉なのに、長すぎないか？ そうだな、要点だけを書き記して、次に進もう。

・・・日程沿って、作業を始めた。大まかにいえば、飯岡灯台 27 日夕方、犬吠埼灯台 28 日午後・夕方、29 日午前・夕方、30 日午前・夕方、の計七回の写真群の補正と加工だ。もっとも、犬吠埼の方は二台のカメラだったから、厳密にいえば、十三群のインターバル写真ということになる。

撮影は五分毎で、だいたいワンセット三時間、長いものは五時間だったから、それぞれ 36～60 枚ほどの枚数になる。これを一枚一枚、補正・加工していくのだ。

イメージとしては、灯台あるいは海の中の岩は不動で、その周りの、波とか雲とか空とか人か、そういったものだけが変化していく、という感じのものだ。

ところが、そう甘くない。まず、補正だが、灯台はほとんど傾いているし、水平線はゆがんでいる。これを垂直に、あるいは水平に補正する。まずここで、引っかかった。一枚ずつ補正したにもかかわらず、写真ごとに、傾きやゆがみが、いくらか微妙に異なる。

今回の一番の発見は、垂直も水平も絶対概念ではなく、相対的な概念だ、ということだ。つまり、周りの状況によって、垂直に見えてしまうこともあれば、本当はゆがんでいるのに水平に見えてしまうこともあるのだ。

さらに言えば、その時の気分や体調も、影響してくるのかもしれない。真っすぐになった、あるいは、水平だ、と思って補正を完了する。ところが、同一写真群を見比べてみると、微妙に、なかには、明らかに、灯台が傾いていたり、水平線がたわんでいたりする。

そういった写真を、もう一度補正しなおす。が、今度はトリミングが微妙に違っているので、連続させると、灯台そのものが、少しずつ動いてしまう。

色彩やシャープの問題も重要だ。だが、この垂直、水平の問題はさらに深刻で、当初のイメージを現出させることができない。のみならず、何回補正を繰り返しても、確実には、灯台や岩の不動が担保されない。

…参った、要するに、補正・加工の枚数が多いのに、そのほとんどが＜垂直・水平＞問題で失敗している。したがって、もう一度、さらにもう一度と補正を繰り返さなければならなくなったわけだ。お手上げだった。

そのうち、六月三週に入った。時間切れ、体力切れ、気力切れ。スライドショー用の写真の補正・加工をあきらめた。自分に、

こう言いわけした。スライドショーを作るのは、まだ先の話だし、その時やればいいや、と。

ま、もともと、旅日誌の方は、いまも書いているわけだが、さほど妥協もせず、字数も時間も関係なく、正直に言えば、最後の方は少し端折ったが、自分的には、ある程度は記録できたという納得感がある。

それと、〈ツイッター〉に関しては進展があった。というのも、旅日誌は、ほとんど読まれることのない〈ブログ〉にだけ掲載されるはずだった。それが、たとえ三行の抜粋とはいえ〈ツイッター〉でつぶやくことができるようになったからだ。

やはりね～、書いたものを机の中にしまっておくより、誰も見ないとしても、誰かが見てくれる可能性を信じたり、あるいは、世界を意識したり、自己開示したり、といった自分の、いや人間の姿勢が、うれしいではないか。

家にこもって、もう何も発しないまま、朽ち果ててもいいわけだけど、まだ力が残っているような気がする。まだ、世界に飛び出す元気があるような気がする。

ニャンコがオヤジに残してくれた、つかの間の〈自由〉を、精いっぱい生きることができれば、文字通り、死ぬ苦しみを味わわせてしまったニャンコも、オヤジのことを許してくれるかもしれない。

…二回目の灯台旅は、いちおう、新潟県の角田岬灯台に決めている。が、天候次第で、もう少し近場の灯台を撮りに行くかもしれない。犬吠埼灯台は、そのうちまた、季節がよくなったら行くつもりだ。泊まる場所は、例の一泊¥7700のビジネスホテルにしよう。

<灯台紀行・旅日誌> 犬吠埼編、終了。